
西洋と東洋の「都市」成立のプロセス

－日英の比較を中心として－

The Process of Urbanization in the Western and Eastern World:
Especially the Cases of British Isles and Japanese Archipelago

宇野隆夫

UNO, Takao

[Abstract] In both the East and the West, it is clear that various types of individual occupations were undertaken in various regions, and it is difficult to understand the formation of cities from a simple model. However, it is now coming to light that there are more than a few phenomenon common to the process of social development in Middle East Asia and China, or in England and Japan. We can conclude English phenomenon which are also common to Japan if we think of the formation process of villages which attracted resident populations, performed defense and central area functions as the process of the formation of cities. (Table 1).

1. There is a long stage in which agriculture and livestock farming are added (Neolithic age, earlier bronze age).

2. Several revolutions occurred in conjunction with the intensified farming and the formation of cities begun (later bronze age, iron age).

Number 1 is a unique and stable system suited to northern environments with temperate forested areas. It is similar to the Jomon period. The collective religious activities were very important in these societies.

Number 2 is the development of the latent production ability of the forests. It is similar to the Yayoi period. The land division, religious innovations and fortified large settlements were very important in these societies. These social revolutions were based on the interchange with the Bronze/Iron age advanced society.

はじめに

西洋においては、ゴードン・チャイルドが農業革命・都市革命、また西アジアとヨーロッパの関係についての大きな枠組みを提示して以後、研究が著しく緻密化した。その結果、各地域・各時期の実体が明らかになり、自立的で个性的かつ非常に多様な営みがなされたことが判明してきた。そして今、その全体を単純なモデルで理解することは、極めて難しいと思われる。

むしろ現在、西洋・東洋の核地域である西アジアと中国、またそれらから遠く離れたイギリス諸島（ブリテン）と日本列島の社会発展のプロセスに、共通する現象が少なくないことが浮かび上がってきている。勿論、西洋と東洋においては暦年代に違いがあり、異質な要素も少なくない。しかし西洋と東洋において、系統的な関係に拠らないであろう共通点を抽出して、両世界の構造を比較することは無駄ではないと考える。

私はこの立場からブリテンにおける最近の食料生産経済と儀礼・集落に関わる研究成果の一端を紹介すると同時に、日本と共通すると考える要素を抽出することとしたい (Fig. 1, Tab. 1)。なお最初から都市・町と村落を二分的に定義することは生産的でないと考えるため、まず中心地機能をもち集住・防御を特色とする最初の長期型集落が、どのような背景・プロセスで出現したかを示して後に考えることとしたい。

1. ブリテン中石器時代・新石器時代・青銅器時代前期と日本縄紋時代

ブリテン諸島：ブリテン諸島の後氷期における貝塚を含む中石器時代遺跡からは、ヘーゼルナッツほかの植物性食料、鹿や猪や鳥ほかの動物性食料、各種水産食料資料が知られており、これらが主な食料源であった [Clark 1972, Mithen 1999]。他方、オックスフォード州コットヒル・フェン Cothill Fenにおいては、6800年BP頃と測定された中石器時代土層から小麦花粉 *single Triticum type* が出土しているが [Day 1991]、種実の出土がなく、評価は定まっていない。

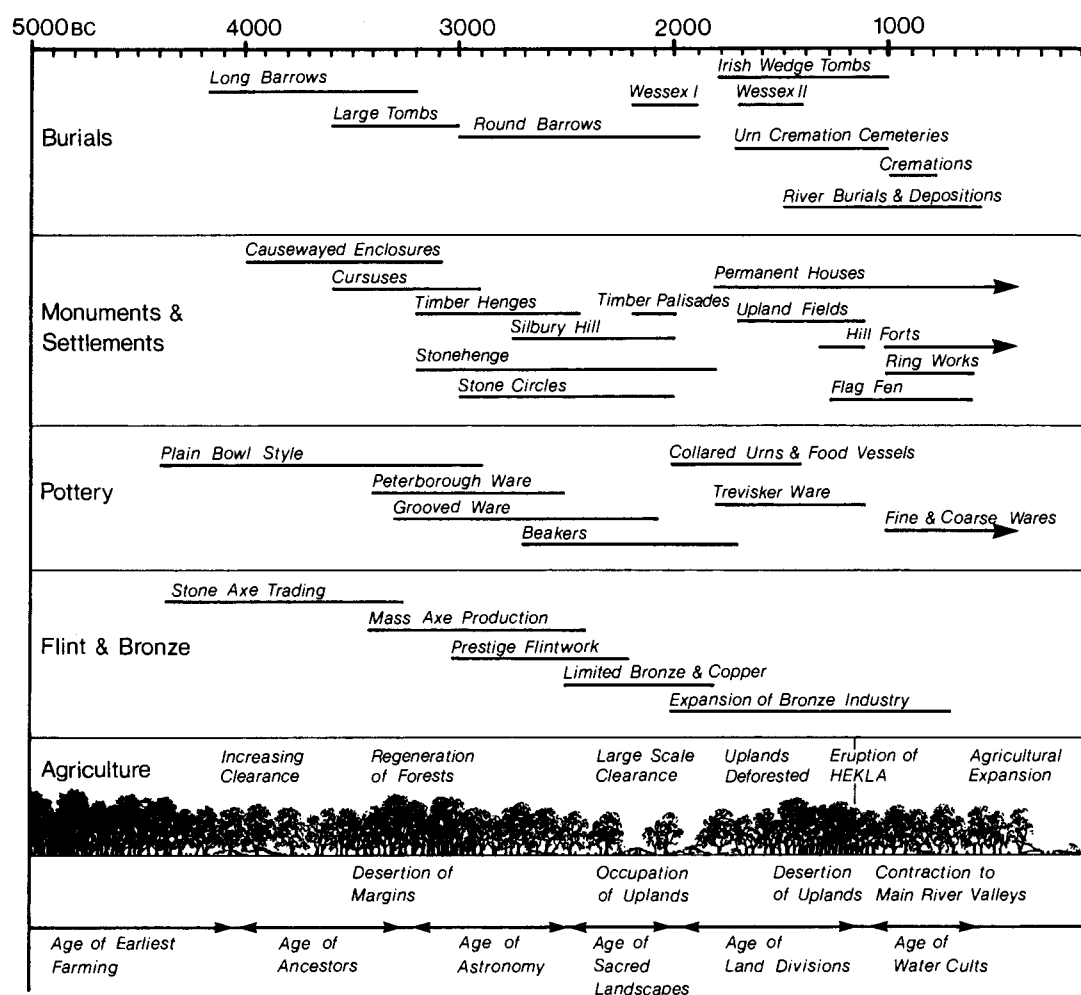


Fig.1 ブリテン新石器時代～鉄器時代の主要動向 [Peason 1993から]

従来の知見では、中石器時代の遺跡は規模が小さく数も少ない。貝製ほかの装身具類を除くと宗教・儀礼的活動の資料は顕著ではない。住居の発掘例は少なく移動性の活動を示す調査例が多いが、アイルランド北部マウント・サンデル Mount Sundelにおいて、直径5m余りの炉が付属する円形住居が発見されている〔Woodman 1985〕。凹地を利用して作った竪穴住居に近いものである。そして紀元前七千年紀中頃に海進によってブリテンがヨーロッパ大陸から切り離され、半島から諸島に変化するという大きな環境的变化が生じた。

これに対して新石器時代（紀元前4千年紀～3千年紀中頃）に至ると、小麦（emmer, einkorn）・大麦（six-row）やウシ・ブタ・ヒツジなどの栽培植物・家畜の確かな資料が出現して、周溝遺跡 Causewayed enclosureや巨石墓 Megalithic tomb・巨石記念物 Megalithic monument を活発に営むようになり、文化内容は著しく複雑化した。当時は気候が温暖化した時期に相当し、大陸ヨーロッパの影響下で農耕社会・定住集落が始まったと評価されていたが、その評価は変わりつつある。

このうち農耕については、ブリテン・北欧において付加的である段階が、新石器時代を通じて続いたことが明らかになりつつある〔Moffet, Robinson and Straker 1989, Thomas 1991, Matui, Kaner and Rowley-Conwy 1995, 藤尾 1996ほか〕。このことは栽培植物・家畜の普及が新石器時代の中で、比較的速やかに進行した西アジアとの大きな違いである。

ブラッドレー・ホッダーは1979年の時点において、新石器時代後期に採集経済が復活し、集約的な農耕が成立するのは青銅器時代中期であると提言していたが〔Bradley and Hodder 1979〕、その後になされた植物性食料の定量データの集成から、新石器時代を通じて植物性食料資料において野生種が栽培種より高い比率を占める傾向の存在したことが判明している〔Moffet, Robinson and Straker *ibid.*〕。

トーマスはこの現象について、「初期農耕社会は野生食料資源にかなり依拠することが多い」〔Hillman 1981〕という一般的な解釈を退けて、農耕・狩猟・採集からなる季節的な生業サイクルが存在したと評価した〔Thomas *ibid.*〕。そして穀物資料の出土が宗教的性格の強い遺跡に多いことから、主に祭祀・儀礼に用いたと推定している。

トーマスは家畜骨についても、多くが儀礼・埋葬と関わる場で発見されることを指摘して、動物遺体の部位の偏りからその扱いをより詳しく検討している。中でも新石器時代前期において家畜の50%以上の比率を占めることが多いウシは、周溝遺跡や長形墳からの出土が特に多いものである。そして一つの地域において周溝遺跡にウシ頭骨を埋納し、長形墳からウシ四肢骨が出土するというような関係を復元できる事例が少なからず存在するという。

このことからトーマスは、ウシが単に宴会で消費されるだけではなく、周溝遺跡で解体加工したウシ（肉・皮）が儀礼の場を行き交うネットワークが存在したとしている。これと似た現象は人骨にも存在して、死者とウシは同様に空間を移動すると理解されている。なお長形墳は火葬集合墓である。

新石器時代後期にはブタの比率が高まる。これを当時の森林環境の増加によるものとする解釈に対して、トーマスらは猪が増加しないこと、またブタの増加が刻紋土器 Grooved Ware の使用圏と関わる文化的な現象であり、形を変えた儀礼的な使用とした〔Richard and Thomas 1984〕。

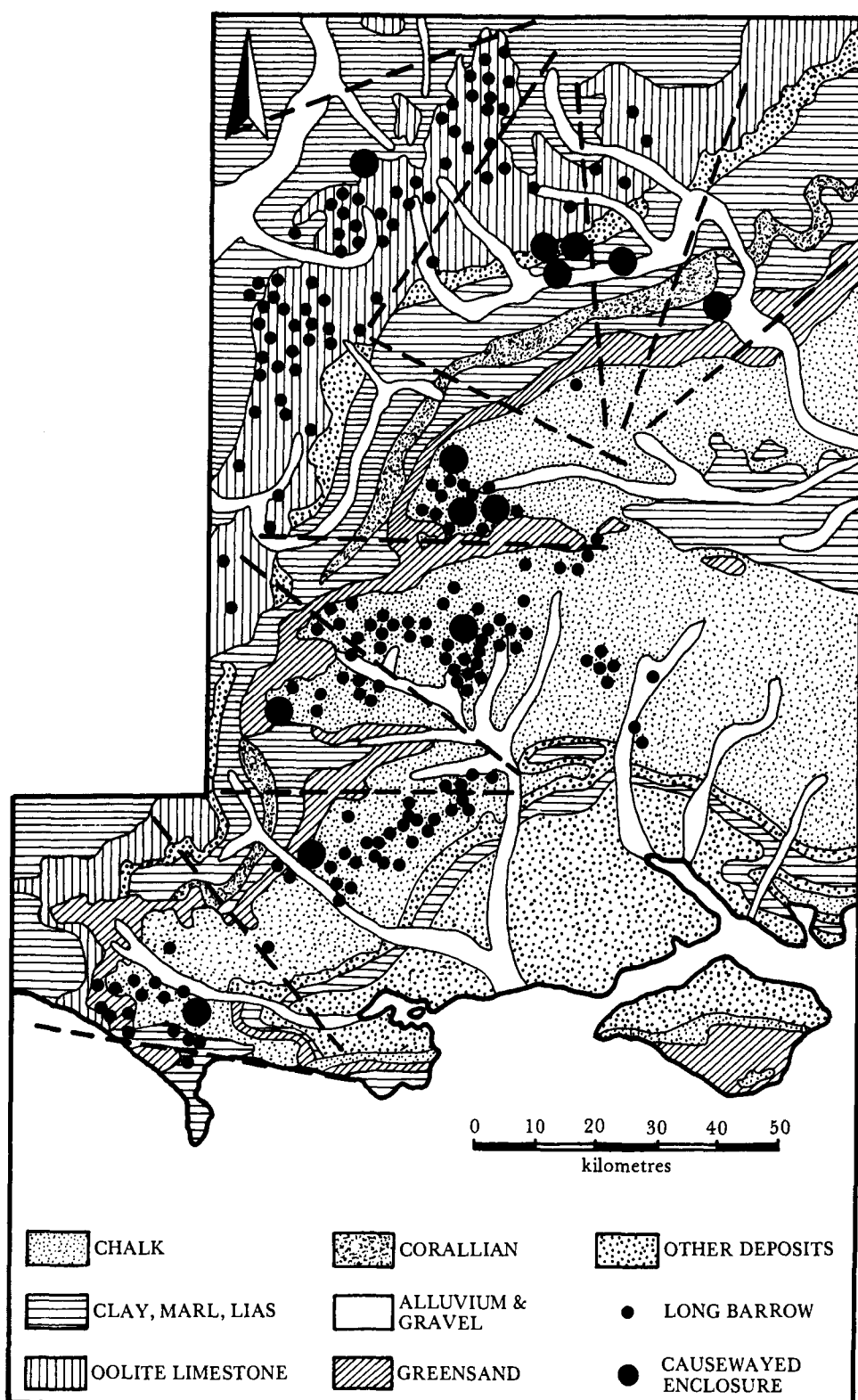


Fig. 2 ブリテン・ウェセックス地域の記念物と空間構造 [Baker and Webley 1978から]

バーカーが示したブリテン・ウェセックス地域の生業モデルは、周溝遺跡と巨石墓の空間分布と移動性の生業活動の関係を具体的に示すものである (Fig. 2, Fig. 3, Barker 1985)。周溝遺跡を中心として長形墳が集合する単位は、低地の森林環境から高地の草原環境までを含んでいる。従来は当地域はすべて森林であり焼畑によって切り開いて農業・牧畜を始めたと考えられていたが、当初からモザイク状の環境を利用したことが判明してきている [Barker and Webley 1978]。長形墳は基本的に高地に分布し、周溝遺跡は高地から低地にまで分布する傾向が存在した。

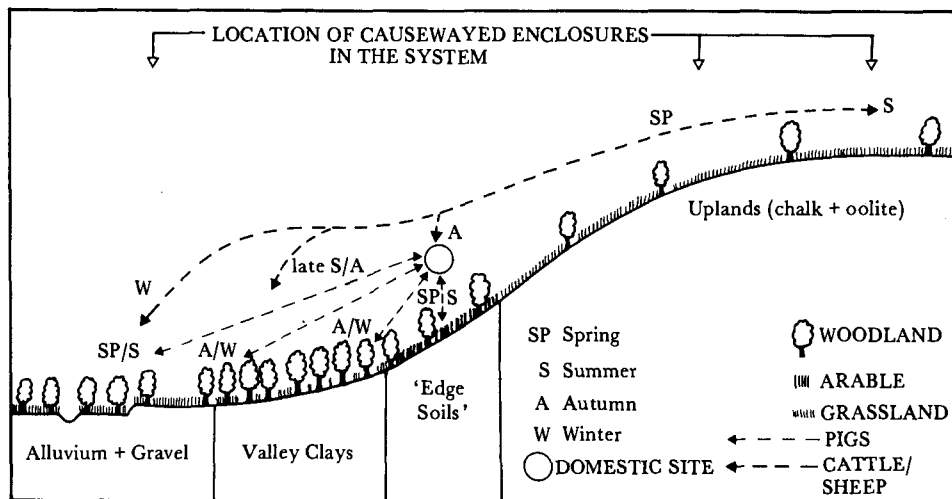


Fig. 3 ブリテン・ウェセックス地域における新石器時代前期の生業活動 [Baker and Webley 1978から]

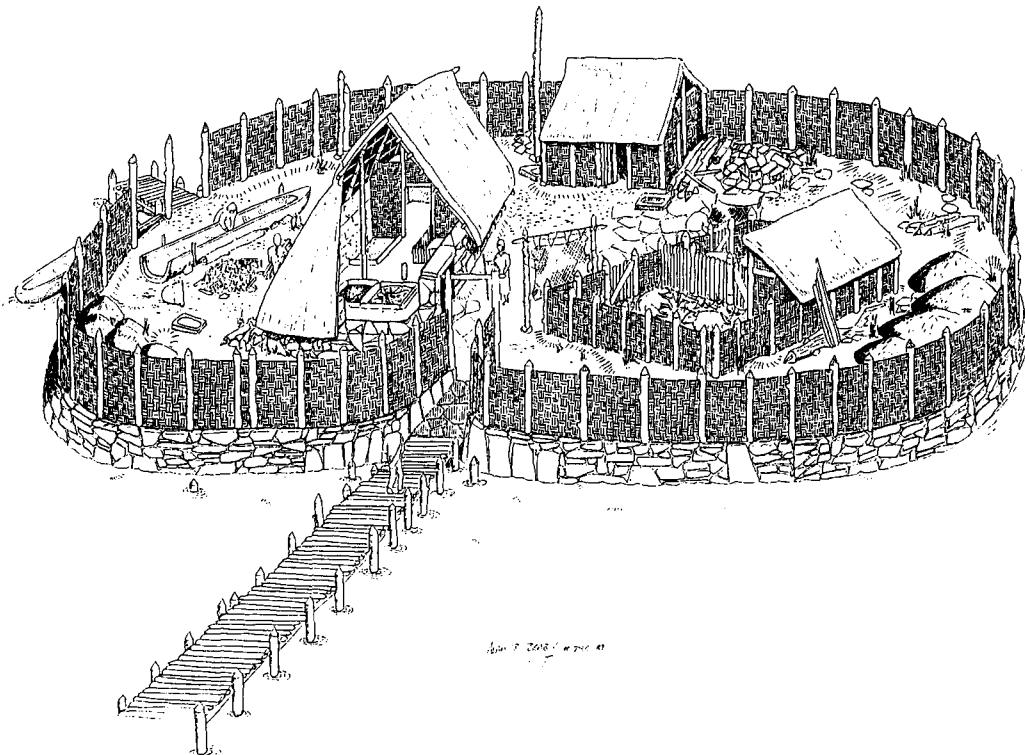


Fig. 4 ブリテン新石器時代の集落 [Loch Olabhat Western Isles, Peason 1993から]

そこから復元されるサイクルは、夏に高地・冬に低地に移動するウシ・ヒツジや森林の中を移動するブタを追うというものである。この移動の中で野生食料資源を採集し、農耕を行ったであろう。耕地区画・灌漑施設は基本的に存在せず、播種・収穫からなる粗放な天水農耕であった可能性が高い。ウィットルは記念物（周溝遺跡・巨石墓）がこのような移動性の営みの枠組を提供し、地名の役割を果たしたであろうと評価している〔Wittle 1999〕。

ブリテン新石器時代の住居は方形・円形の掘立柱建物があり、礎石を用いる場合もある〔Wittle ibid.〕。これらは単独か少数の単位で発見されて出土物もごく少なく、恒久的な居住を推定しにくい事例が多い（Fig. 4）。ただし新石器時代後期のオークニー島には、スカラ・ブレ Scara Braeやバーンハウス Barnhouse など、大型で長期型の遺跡が例外的に存在した。

1970年代まで、環濠集落として理解されていた周溝遺跡について、ホッダーは自然の中の記念物と評価した〔Hodder 1990〕。これは陸橋状の切れ目をもつ周溝をめぐらして、その内側には土塁や柵を設けたものである。防御施設にも見えるが、溝の切れ目が多く防御機能が疑われるものである。ウィンドミルヒル Windmill Hill例は、直径約350mであり、三重の周溝をもっている。これは初期には定住集落と推定されていたが、調査の進捗によって晩秋の季節的利用が復元されている〔Smith 1966, Fig. 5〕。

周溝遺跡の内部には、建物が密集するほどには存在しない反面、石斧・鹿角・火葬人骨などを丁寧に埋納することが多い。周溝内にもウシを中心とする動物骨・炭化穀類・人骨・石器・土器類を場所を異にして集積し、様々な儀礼がなされたと復元されている〔Wittle ibid.〕。

周溝遺跡は新石器時代後期（紀元前3千年紀）には営まれなくなるが、この頃から出現して青銅器時代前期にまで存続する環状列石 Stone circle、ストーンヘンジ Stonehenge、数キロに及ぶ道状遺構 Cursus などの記念物に発展したとみる考えが有力である。新石器時代後期は、これら巨石記念物造営の最盛期であり、その方位が太陽や月の運行と関わりと指摘されることが多い。リチャードは複雑な天文学的知識を示すものではないが、季節を区分して暦の役割を果たしたであろうと評価している〔Richards 1991, Fig. 6〕。

青銅器時代前期（紀元前3000年紀中頃～紀元前2000年紀中頃）については、オランダを中心とする地域からのピーカー土器の伝播、青銅短剣・斧や装身具を副葬する円形土葬個人墓の出現として重視されてきた〔宇野1984, Fig. 7〕。この時期についても、色々な再評価がなされつつある。大勢として大量の移民は否定される方向にあり、新しい道具のセットは新しい観念の伝播と理解される傾向が強まっている。ただし広域の交流が活発化したことは疑いなく、それが次の時代の変革を準備したであろう。

この時期の集落遺跡は、新石器時代よりもさらに確認例が少なく、これはヨーロッパ青銅器時代前期に共通する現象である〔Peason 1999〕。わずかにスコットランド Western Isles における礎石を使用した円形・楕円形住居群が目立つ程度であり、ほとんどの事例では直径5m前後の小型建物が散発的に発見されている。堅固で大型の建物群が出現しだすのは、この時期の終り頃である。栽培種としては、小麦・大麦・豆・カラス麦・亜麻、家畜としてウシ・ブタ・ヒツジ・イヌがあり、森林開発も一定程度に進捗した。しかしそれは本格的な農耕社会の存在を示すほどのものではなく、依然として散居・移動性の生活が基本であった。そしてこのような活動は、従来と同様に活発

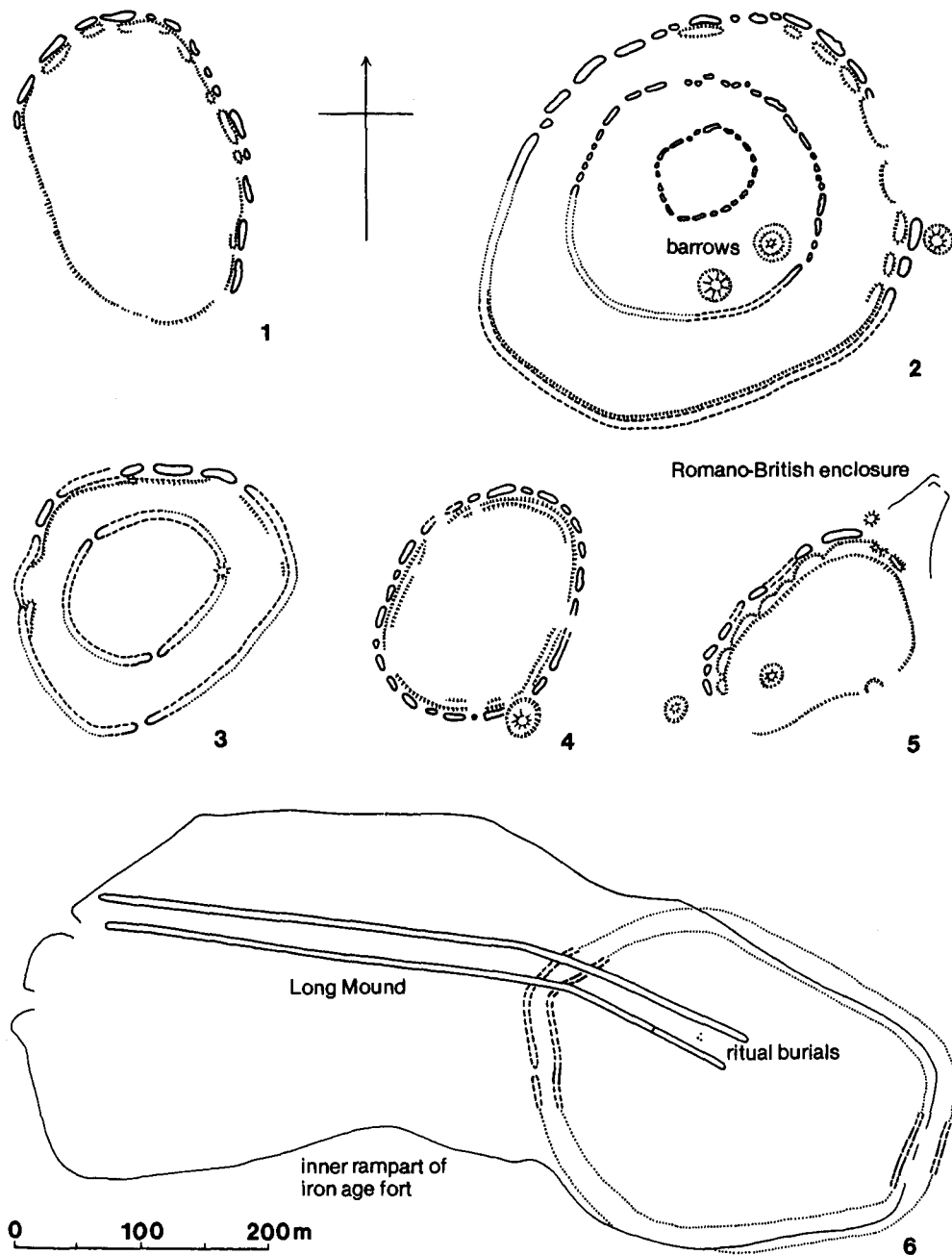


Fig. 5 周溝遺跡 [Megaw and Simpson 1979から]

な宗教的営みによって成り立っていた可能性が高い。

ストーンヘンジほかの新石器時代後期の記念物は、青銅器時代前期にまで存続することが多く、かつしばしば改変を加えた。特に石室が開口していた長形墳の入口を閉塞することが多い [Armit 1996]。そして新しい円形墳は新石器時代後期の記念物に近接して築造することが多かった。円形

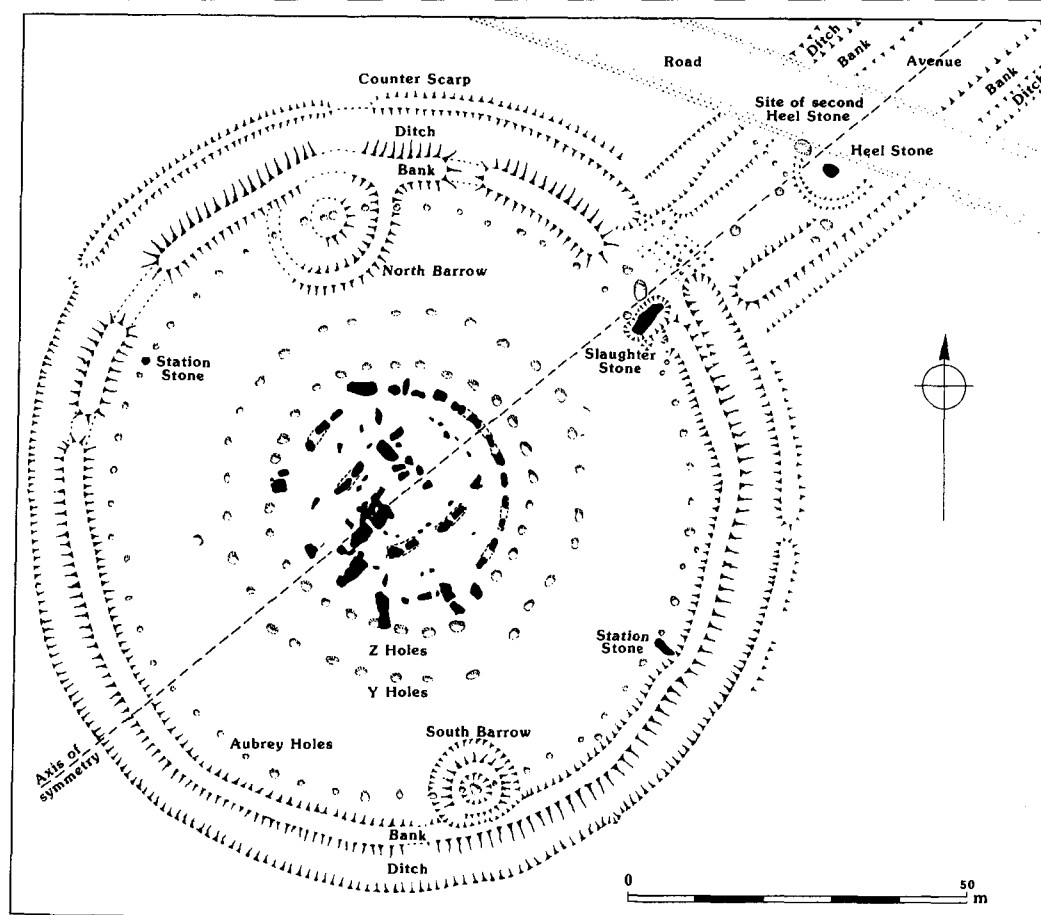


Fig. 6 ストーンヘンジ [Richard 1991から]

墳の埋葬施設は開口しないので、従来の記念物と様式的な斉一性をもってランドマークの役割を果たしたであろう。

円形墳に副葬することが多い金属器の初期の事例はアイルランド・コーレア Corlea において木道から発見された金属斧であり、年輪年代法によって紀元前2268-2251年と測定され、銅採掘はアイルランド・マウントガブリエルで紀元前1800年頃、ブリテン・ウェールズの Cwmystwyth で紀元前1500年頃と推定されている [Blick 1991, Peason 1993]。それは本格的な坑道採掘であり、その出現はさらに遡る可能性が高い。錫に関しては不明であるが、埋蔵量は豊富であり採掘した可能性が高いであろう。

この頃、短剣を中心とする金属器を円形墳に副葬する一方で、金属斧・矛先などを水辺に埋納しだした [Needham 1988]。副葬と埋納には使用器種に違いが存在し、埋納は固有の目的をもつ行為であったであろう。次期以後には、副葬が衰退して埋納が中心となっていく。その空間的な関係から、おそらく記念物・墳墓は世界観における中心祭祀、埋納は境界祭祀の性質をもったと推察する。

青銅器と同様に重要な役割を果たした土器は、ビーカー土器 Beaker pottery の到来から、フードヴェセル様式 Food Vessels, 口縁帯骨壺様式 Collard Urns をへて、算盤玉形骨壺様式

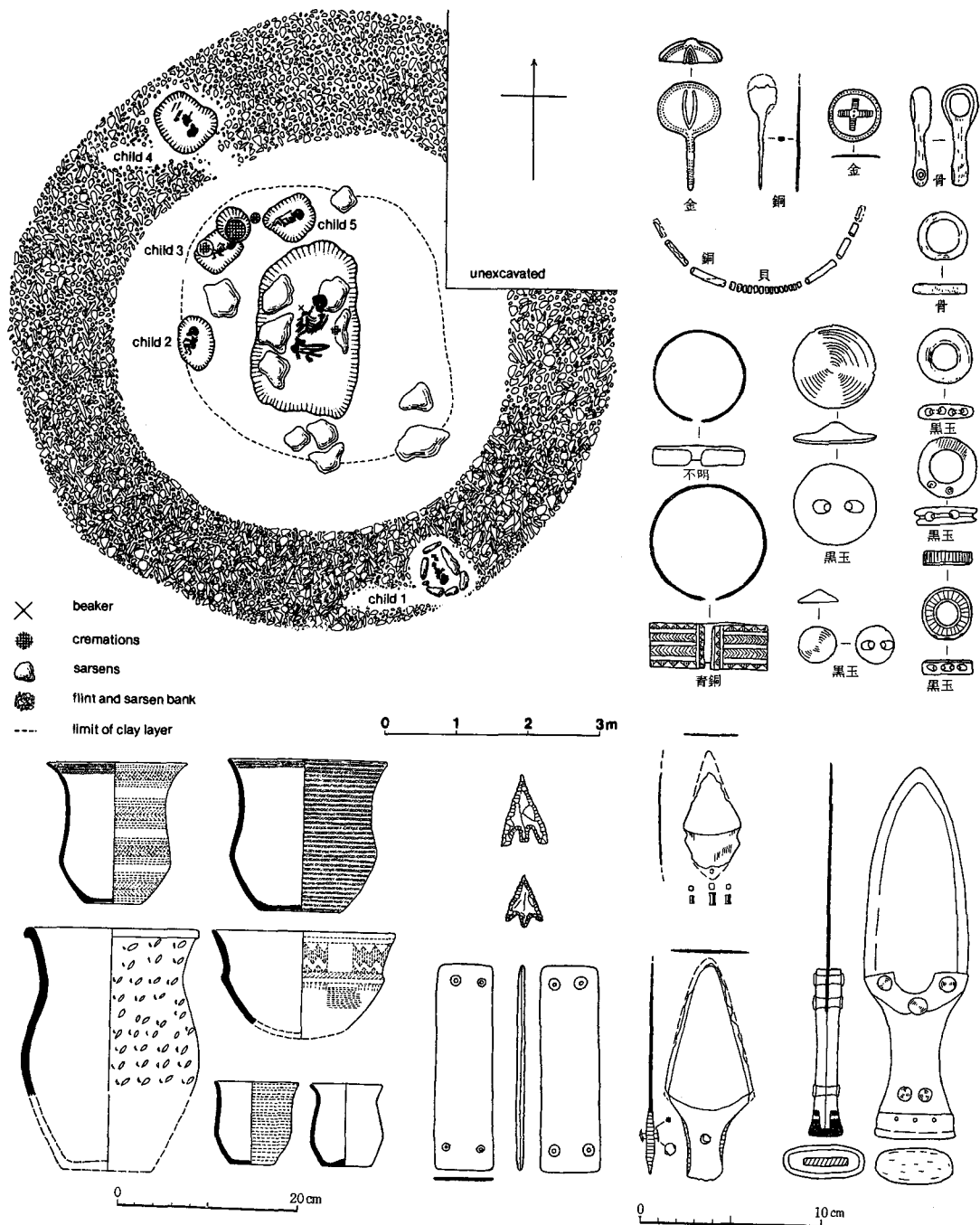


Fig. 7 青銅器時代前期の円形墳と副葬品 [Megaw and Simpson 1979, 宇野 1984から]

Biconical Urns へと在地化・粗製化した。様式名に示されるように火葬が復活する。なお在地化は大陸ヨーロッパの土器様式に対してであって、ブリテン内においては広域土器圏を形成したものである。それは記念物と同様に社会的関係を作る機能をもつものであった可能性が高い。ブリテンの中で土器の地域的差異が強まるのは、この時期の最後の段階以後であった。

なおビーカー土器は、砂粒の少ない胎土を用いて製作し使用痕が少なく、主に墓から発見される

ものである。花の花粉が検出されることがあり、ハチミツ酒の容器、あるいは花の供献用土器とする解釈がある〔Tipping 1994〕。ただし器種構成は単純ではなく貯蔵・煮炊き・食膳用のものが存在した。集落遺跡の調査例の少ないため、土器の用途全体の解明は今後の課題である。

以上、ブリテンにおける中石器時代から青銅器時代前期に至る時期の研究の一端を紹介した。その中で海をこえた交流によって農耕牧畜を受容したものの、混合農業社会といえるほどには農耕牧畜に依拠せず、小規模移動性の生活を基本とする中で社会を充実させた。

石斧・石鏃のように戦いにも使用できる道具は新石器時代から存在し、ドーセット州ハンブレドンヒル Humbledon Hill 周溝遺跡におけるように矢を受けた人骨例が存在する〔Pearson 1993〕。しかし多くの人々が凝集する軍事施設を営み、盛んに集団戦闘を行った形跡は存在しない。青銅器時代前期の銅・青銅短剣も華奢であり、実用性が疑われるものである。

景観的には、人々の行き来を妨げる施設は少なく自由な往来が可能であり、墳墓・記念物およびそれと関わる祭祀が特に重要な意味をもち、人々の営みの枠組を提供した。農耕は付加的で集落は小規模であったが、組織的な大規模土木工事をなしえる社会が成長していた。

縄紋時代との比較：ここでは縄紋研究の膨大な成果の一端を紹介しながら、ブリテンとの比較の視点を述べたい。

ヨーロッパの三時代区分法に合わせて、縄紋時代は中石器時代か新石器時代かという議論が存在した。しかし北ヨーロッパにおける実態が明らかになってきたことによって、異なる比較が可能となってきた。縄紋社会は、ほぼ同時期のブリテン中石器時代から青銅器時代前期に至る社会的発展の総体に匹敵する内容を含む、と評価することが本項の結論である。

上記のようにブリテンを含む北欧において、青銅器時代前期に至るまで農耕の比率が低く家畜の飼養も含めて儀礼を主な目的とした可能性の高いことが判明してきた。縄紋時代においても野生植物の利用・半栽培が複合し、これに外来の栽培植物が加わったことが明らかにされている〔辻 1999, 高橋 1994〕。また縄紋時代にブタの飼養がなされた可能性が高く、イノシシとともに儀礼的に扱われたことも示されている〔西本 1999〕。これらの成果によって、当該期のブリテンと日本の生業に関するイメージの距離は縮まってきた。

このような日英の在り方を、野生種が存在して農耕・牧畜の起源となった地域およびそれに隣接した地域に対して、より厳しい環境と独自の資源をもつ地域における農耕・牧畜に対する姿勢の型と理解しておきたい。とりわけ栽培種に対して厳しい環境をもつ地域では、それに生活の基礎をおく危険をおかすより、特殊な役割を与えて活用する方がはるかに賢明な選択である。

ブリテンと日本の重要な違いは、後期旧石器時代にブリテンのほとんどが氷河に覆われていたのに対して、日本には後期旧石器時代の遺跡が多数存在することである。ブリテンの後期旧石器時代の遺跡は、ゴッホス洞窟 Gough's Cave のBP12800±150年（AMS放射性炭素年代測定法）が最古であり、縄紋草創期の範疇に含まれるものである〔Barton 1999〕。ブリテンの緯度は樺太付近に相当し、暖流の恩恵を受けるとはいえ日本よりも厳しい環境である。

日本では縄紋草創期から鹿児島県柵ノ原遺跡・伊敷遺跡ほかにおいて、竪穴建物・配石炉・煙道つき炉・集石・配石遺構、隆帯紋土器・丸ノミ形石斧などからなる安定した集落形成が始まり、その端緒は旧石器時代後期にあった〔新東 1999〕。縄紋時代早期には1時期に10軒ほどの規模で長期

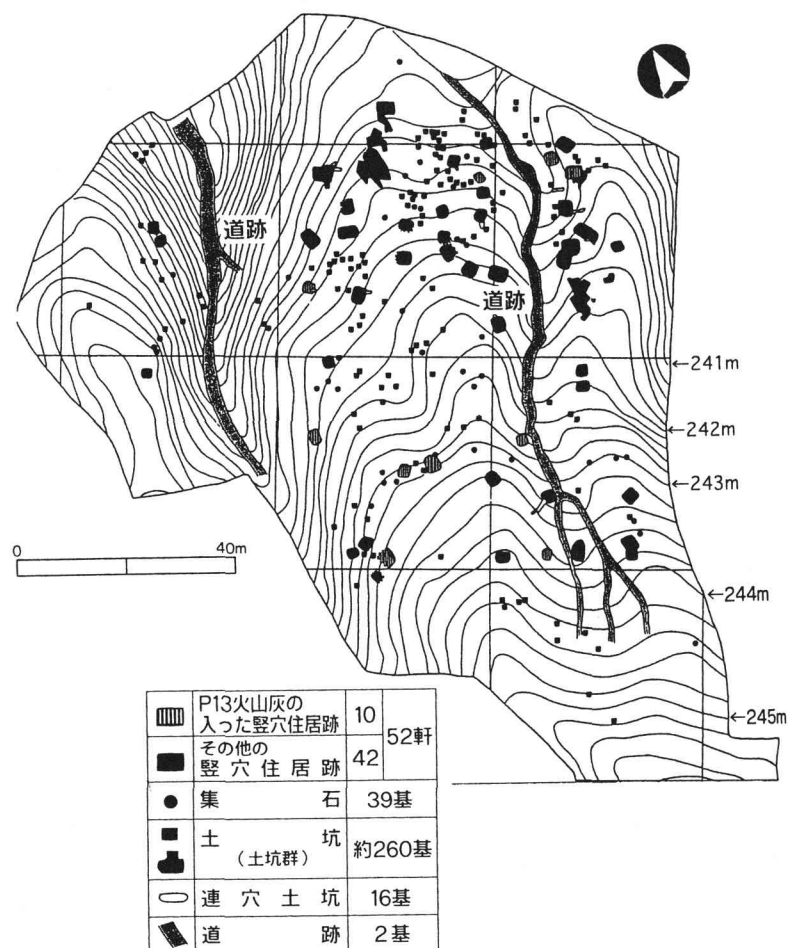


Fig. 8 鹿兒島県上野原遺跡〔縄紋早期初め、新東 1999から〕

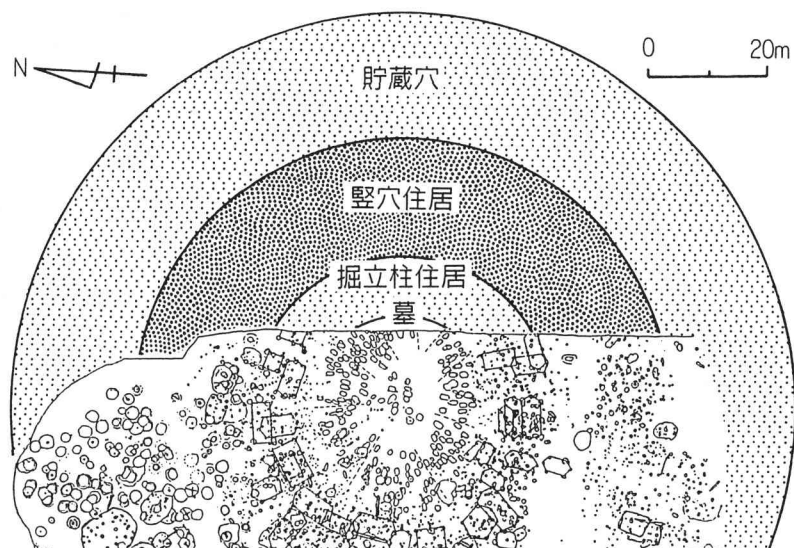


Fig. 9 岩手県西田遺跡〔縄紋前期、小林 1996から〕

に営んだ鹿児島県上野原遺跡が現れ、集落の定住性は縄紋社会の特色となっている (Fig. 8)。とりわけ東日本縄紋前・中期の大型集落における建物数・土器量はブリテンを大きく上回るものがある。ただし縄紋社会にも小規模・短期型の集落は多数存在し、後・晩期には主流の形態となる。

当該期のブリテンと日本の社会の共通性を最も良く示すものは記念物である。ほぼ同時期のブリテン新石器時代前期と縄紋前期に、この営みが活発化した。小林達雄は長野県阿久遺跡の二列の石柱列が蓼科山に向き、群馬県中野谷松原遺跡の広場墓坑の頭位方向・立石が広場の中心からみて浅間山に向くことを、自然の社会化と評価している〔小林 1996〕。その想定する社会的役割は、ブリテン新石器時代の記念物のそれに近いものである。

縄文早期末～前期に出現した直径100m前後の規模をもつ東日本の環状集落は、広場を中心として墓・掘立柱建物・竪穴建物・貯蔵穴が同心円状になるものである〔谷口 1999, Fig. 9〕。それらは、2群あるいは4群の建物・貯蔵穴・墓の単位からなり、各群は墓地を共有・維持する血縁集団の単位であった可能性が高いという。それらが長期にわたって同一場所を占地した結果、同心円構造を形成したものである。

これらの環状集落は、青森県三内丸山遺跡のように中心の柱列や列墓をもつ例を含めて〔岡田 1997〕、ブリテンの散居集落・周溝遺跡・長形墳の全体の役割を集約していると見えるものである。ブリテンでは火葬・再葬が主体であるのに対して、日本では一遺体が一つの墓坑をもつことが主流であるという違いが存在したが、自然の社会化に際して死者の扱いが重要な意味をもった点は共通している。

縄紋後・晩期には散居傾向が強まる一方、区分原理をもつ墓地や再葬・再葬骨集積が出現し、集落と分離した環状記念物が現れるなど、よりブリテンに近い在り方となる。天文観測がなされたいこともブリテンと同様である (Fig. 10)。このように縄紋前・中期と後・晩期の諸施設の空間的配置は対照的であるが、基本は共通していたであろう。

以上、ブリテン中石器時代～青銅器時代前期と日本縄紋時代について、農耕・牧畜にそれほど依拠せず、記念物を頂点とする宗教的紐帯を基礎として大規模土木工事をも実施できるに至った社会と評価した。このような社会が国家形成に向かう型も人類史の中に想定しておく必要があるであろう。日英社会はその形成途上で農耕社会型のコースに移行した。

この段階のブリテンには都市形成の指向はほとんど存在しなかった。これに対して縄紋社会は相対的に定住性が高く、青森県三内丸山遺跡のような大型集落を都市と理解する考えも存在する〔岡田編1997〕。ここではそれを記念物の性格が強いものと考え、都市とは別ジャンルの高度な営みと評価した。

2. ブリテン青銅器時代後期～鉄器時代と日本弥生時代

ブリテン諸島：紀元前2千年紀中頃に始まるブリテン青銅器時代後期（紀元前2千年紀中頃～前8世紀）について、ブラッドレー・ホッダーは記念物の築造を停止すること、埋葬が変化すること、農耕を集約化すること、集落数や土器出土量が急増すること、土地区画 Land division が普遍化することほかをあげて、大きな変革がなされたと評価した〔Bradley and Hodder 1979〕。

この頃、祭祀の中心は記念物・埋葬から、水辺への青銅長剣や矛先の埋納に移った。これに人骨

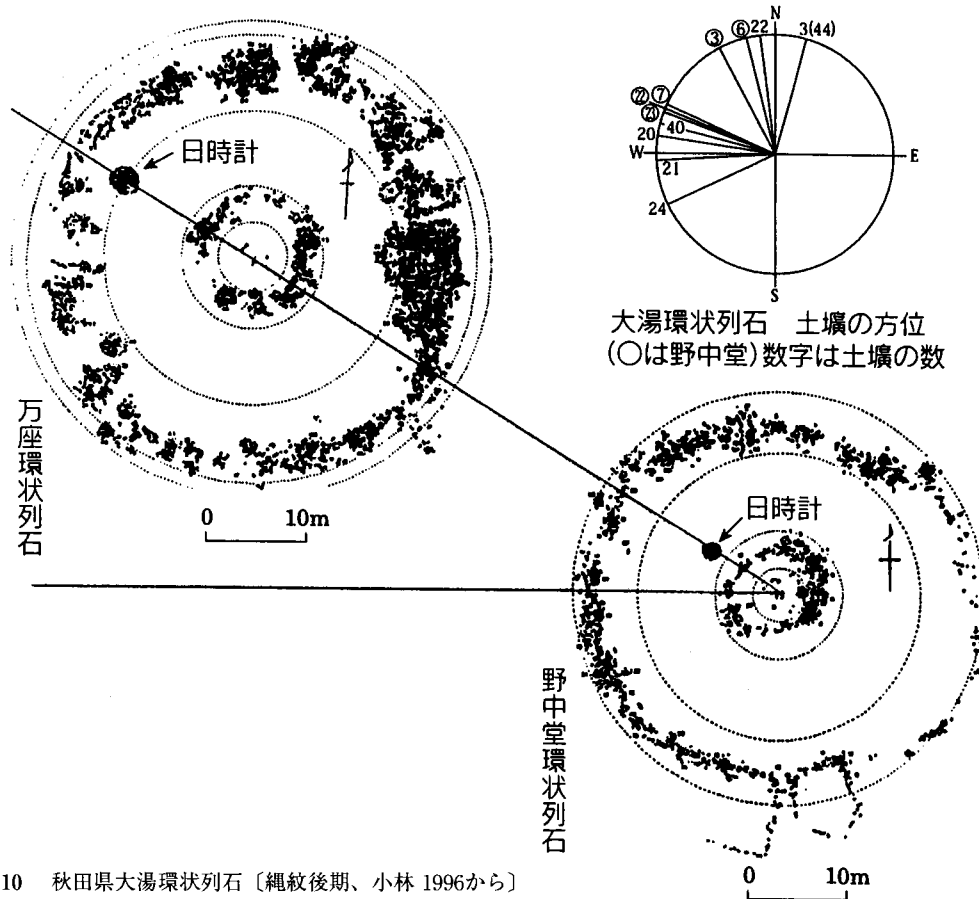


Fig. 10 秋田県大湯環状列石〔縄文後期、小林 1996から〕

がともなうことがあり、人も埋納された可能性がある。これらを鍛冶職人や商人の埋納物とみる見解も存在したが、その周縁的な分布や器種の選択性から、ほとんどを儀礼的埋納とみる考えが強まっている。

ブリテンにおいてはこの頃に本格的な農耕社会（農耕・牧畜に基礎をおく社会）に転換したであろう。その後の成果の多くもこの考えを補強するものであり、前・中・後期と三分されていた青銅器時代も、中・後期をまとめて後期とすることが多くなった。

この時期は従来よりも年平均気温が低下して湿潤となり、ピートの形成が始まった。そして高地の遺跡の多くが途絶する反面、河川沿いの肥沃な低地を耕地化し、従来より集約的な混合農業を確立することが一般的な傾向であった〔Champion 1999〕。作物の中心はエンマー小麦からスペルト小麦へ移り、ライ麦やビーンも出現した。それらを貯蔵する貯蔵穴や穀物倉が増加して、少なからぬ穀物資料が得られている。畜力の利用も始まった。

土地区画は青銅器時代後期以前にも若干の先駆例があるがこの頃に増加し、その顕著なものは、ダートムア Dartmoor における耕地区画例である〔Fleming 1988, Fig. 11〕。ダートムア例は石積み畦畔 reave system によって高地から低地まで広範な地域を長方形に区画するものであり、その中に集落網が存在した。そして耕地より上位の位置に池や井戸を設けて、水路で灌漑するものが存在した。

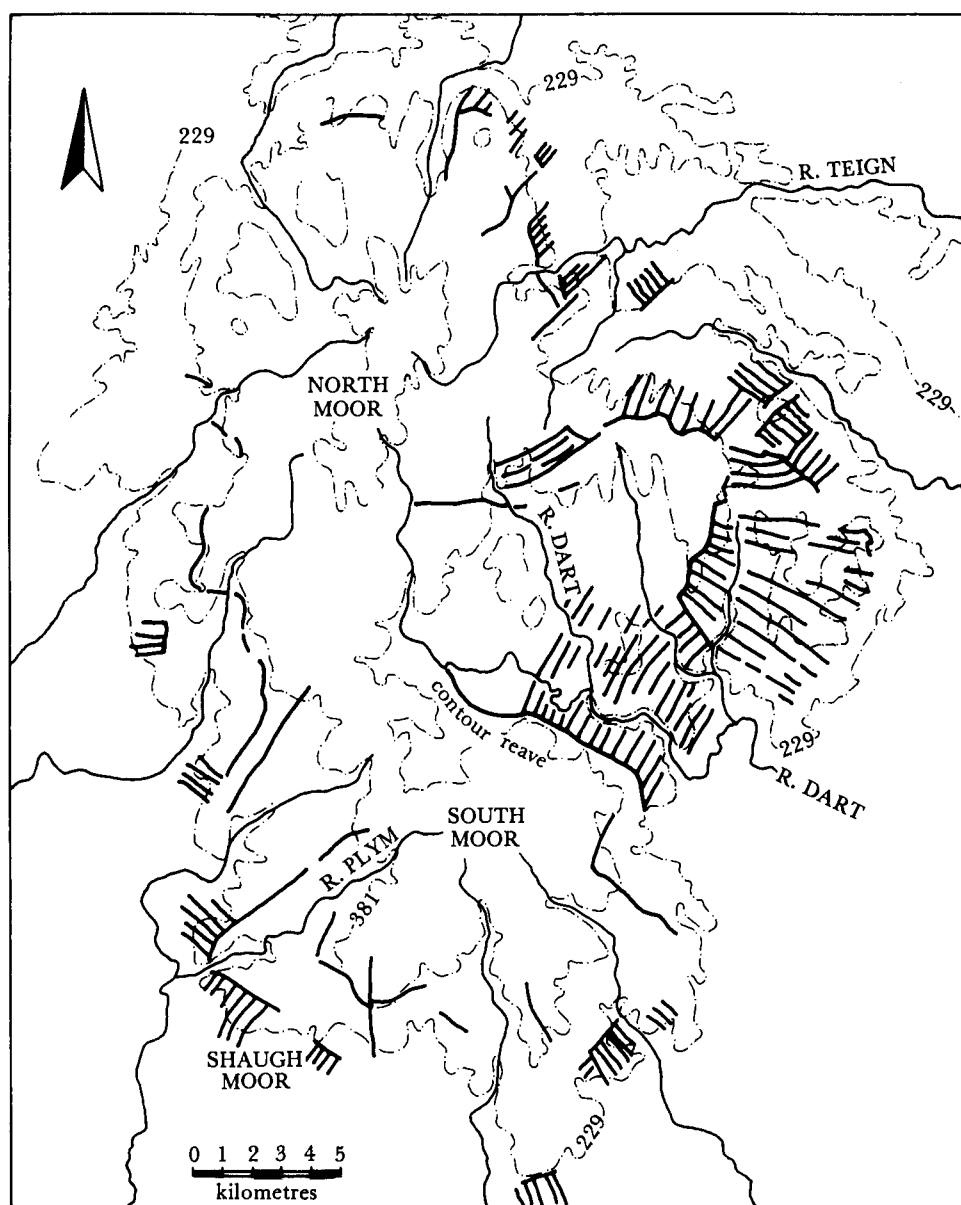


Fig. 11 ダートムアの耕地区画〔青銅器時代後期、Barker 1985から〕

土地区画は、集落の区画にも、円形や方形の濠・土塁として出現した (Fig. 12)。青銅器時代にはまだ小規模なものが多いが、新石器時代の周溝遺跡とは異なり、出入口の数が少なく防御機能をもったと推定できるものである。このような防御集落は青銅器時代後期後半に増加し、防御施設をもたない小規模集落と上下の関係を形成したらしい。上位の集落には大量の土器や食物残渣が出土するものがあり、儀礼的饗宴を活発に執行したことが推定されている [McOmish 1996]。さらには集落と耕地の全体を濠・土塁で区画するものも出現し、鉄器時代の高地性城塞 Hillfort の先駆と評価されている [Bradley et al 1994]。

集落はブリテン東南部で顕著に増加し、その中には青銅器を生産して、貝・コハクなど外来の製

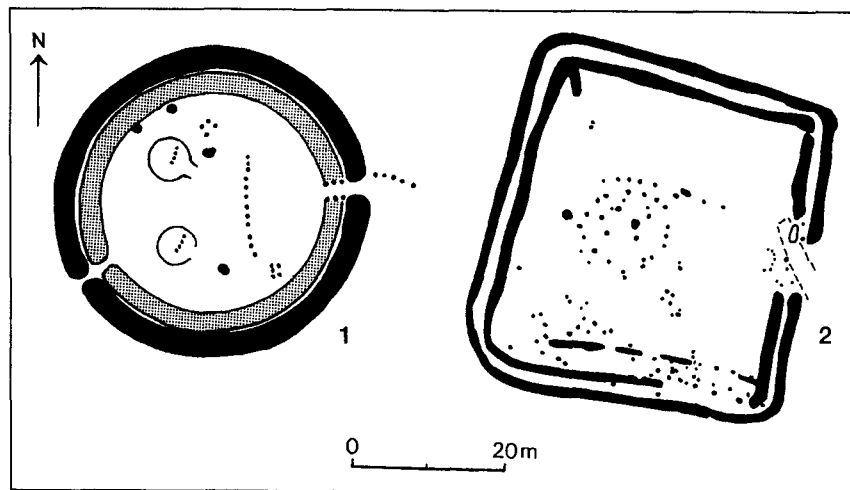


Fig. 12 青銅器時代後期の防御集落 [Hunter and Ralston 1999 から]

品が多数出土する遺跡も存在した [Barrett and Bradley 1980, Needleham 1991]。青銅器は前期のものとは異なり、長剣・矛・闊斧のような武器も斧のような工具も実用的なものとなって潤沢に存在し、かつ祭祀の場においても役割を高めたものである (Fig. 13)。青銅武器には使用痕を残すものが多く、盾や甲のような青銅防具も出現した。

この時期の後半には、青銅馬具・鍋・丸ノミも出現し、車輪も現れた。これらの青銅器の様式は大陸ヨーロッパと共通し、活発な交流が当期の変革の背景をなしたであろう。この頃、従来の丸木舟に加えて、木材を結合したより大型の船も出現した [宇野 1996]。なおフリント製石器がこの時期に減少することは、青銅器が実用的道具の分野でも重要となったことを示している。

この青銅器時代後期の変革についてチャンピオンは、社会の基幹が死者の共同の祭りから、青銅器のような貴重な物品を大量廃棄 (埋納) し、武器を権力の象徴とし、盛んな饗宴をもよおす個人の威信に転換したと総括している [Champion *ibid.*]。そして記念物にかわって高度な技術からなる威信財が役割を高め、社会の階層化が進捗したとされる。卓越した個人の存在を示す資料は乏しく議論の多いところであるが、この時代には従来と質を異にした指導者を必要としたであろう。厳しさを増した環境のもとで農耕社会の確立を可能とした背景を考える上で、有力な解釈と考える。

鉄器時代 (紀元前 8 世紀後半～後 1 世紀中頃、西暦 43/83 年のローマ軍進出期まで) は、3000 をこす特に多くの集落が知られる時期である [Haselgrove 1999]。単独の建物・小規模防御集落から大規模な高地性城塞 Hillfort や城下町風の石造城塞 Broch まで多様なものが知られている。

この頃、土地区画が一層進捗する一方、埋納は衰退し造墓も一部の地域で確認されているだけである。そして鉄器時代前期には基本的に青銅器時代後期の動向を引きつぎ、後期 (紀元前 3 世紀～後 1 世紀前半) の中で、埋納や造墓が復活するという大きな変化が生じた。なお鉄器時代後半は気候が寒冷化から温暖化に転じた時期に相当し、紀元前後に現代とほぼ同じとなった。

鉄器時代には肥沃な低地の耕地開発・土地区画が一層進み、灌漑用の水路を盛んに掘削した。輪作や肥料の使用によって、農耕はさらに集約化されたという [Haselgrove *ibid.*]。鉄器は斧・鑿の

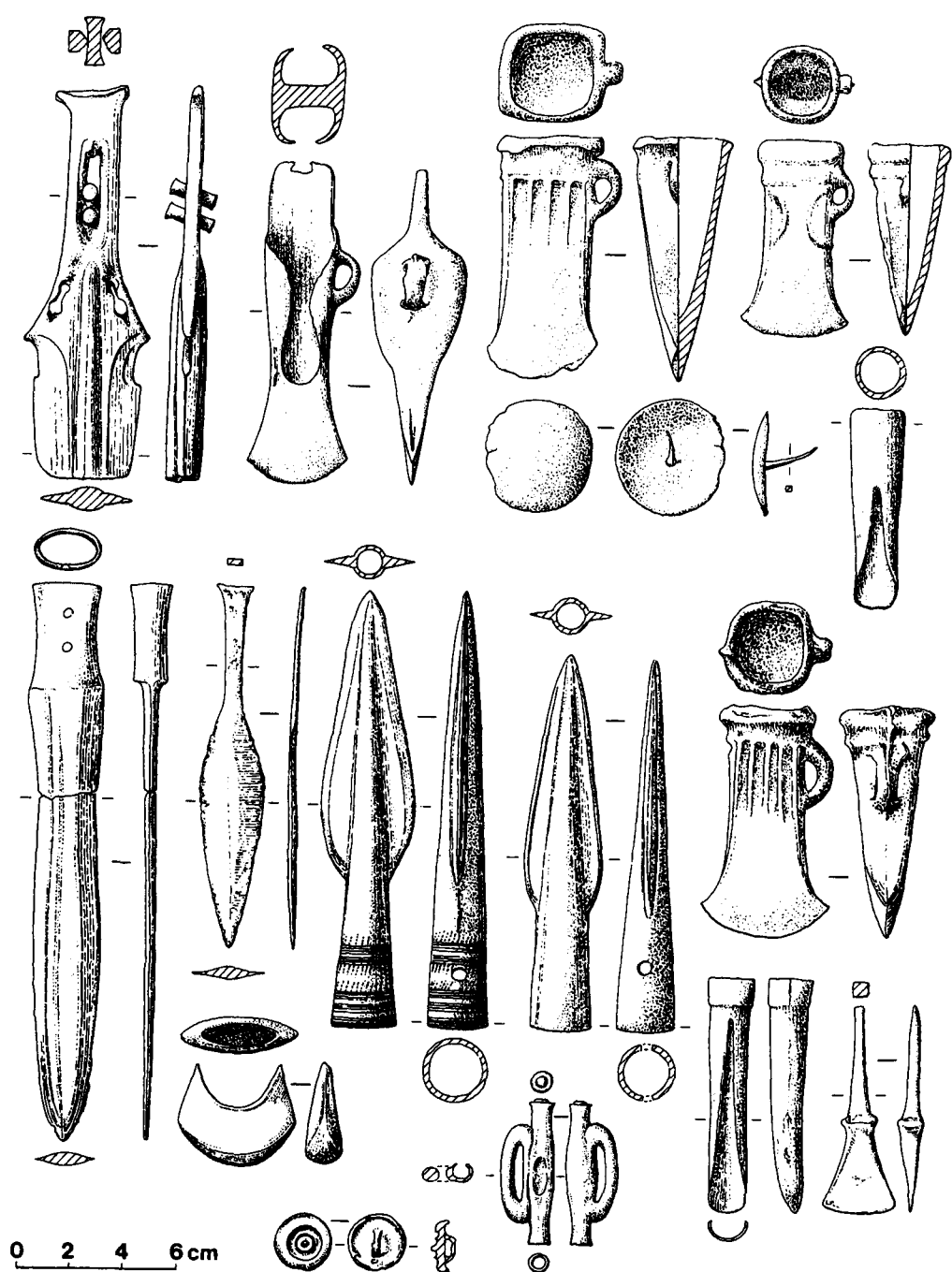


Fig. 13 青銅器時代後期の青銅器〔Megaw and Simpson 1979から〕

ような工具、犁先・鎌のような農具として普及し、低地の森林開発・耕作に使用された。従来は気候が悪化すると森林が増大していたが、鉄器時代以後はこのような森林復元現象は生じなくなる〔Peason 1993〕。

多くの集落で鍛冶を行う一方、鉄素材を埋納することがあり、それが高い経済・宗教的価値をも

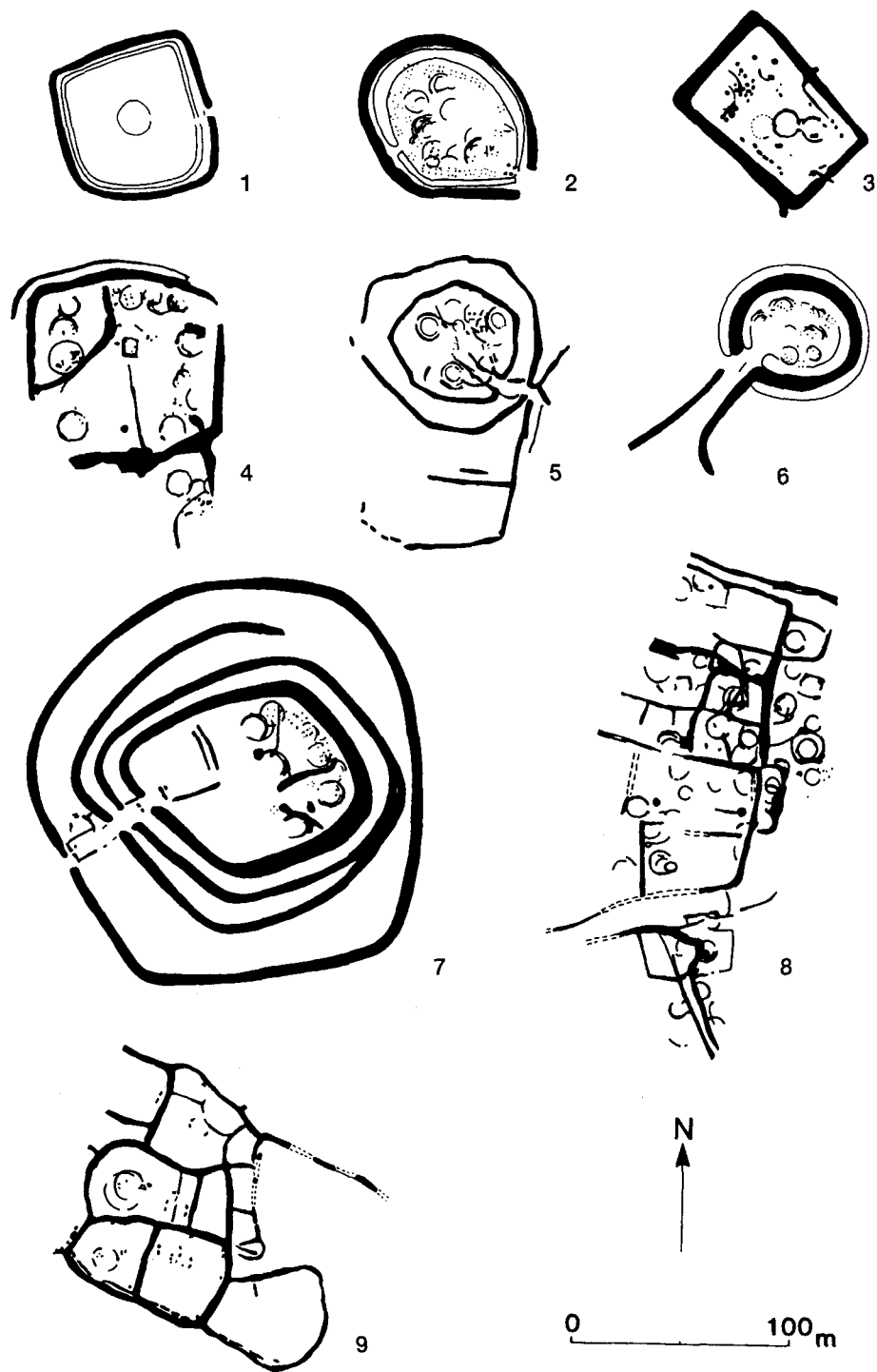


Fig. 14 鉄器時代の集落〔Hunter and Ralston 1999から〕

ったことが推定されている。鉄素材には、剣形・串形・犁先形などがあり、用途によって炭素含有量を異にする素材を使い分けた。このような中で、鉄器時代後期には集落数が著しく増加している。

鉄器時代の集落は多様であるが、建物1～数棟の単位でも濠・土塁をもつものが多く、鉄器時代後期にはこれが群集するものが現れてくる (Fig. 14)。群集する型の集落は長期に存続するため、1時期の規模が分かりにくい。サマセット州グラストンベリー湖畔 Glastonbury Lakeの紀元前1世紀例では、最大14世帯の集住が復元されている〔Coles and Minnitt 1995〕。ローマ属州時代の町の多くは、このような鉄器時代の集住集落の系譜を引くことが多い。

ブリテン鉄器時代を特徴づける高地性城塞 Hillfort は、一部は青銅器時代後期の防御集落から発展し、紀元前6,5世紀の頃から増加したものである。地域・時期による変異が大きい。

鉄器時代前期の高地性城塞は、生活資料が豊富な小型のものと、それが少ない大型のものの2種が存在した〔Haselgrove *ibid.*〕。小型は生活拠点、大型は公共・軍事的な目的のものであろう。単郭(土塁・石塁)で、入口に特に施設を設けないことが多い。

これに対して鉄器時代後期には、前期の多くの高地性城塞が途絶する反面、数は少ないものの、ドーセット州メイドンキャッスル Maiden Castle、ハンプシャー州 デーンベリー Danebury、サマセット州カドベリーキャッスル Cadbury Castle のような特に大型で複郭構造をもったり、入口に虎口様の施設を設けるものが出現してくる。10ヘクタール未満のものから、30ヘクタールをこえる規模ものまで存在した。

その典型の一つとされるデーンベリーにおいては、鉄器時代前期には建物が少なくて多くの貯蔵穴が存在したが、後期には全体の構造が複雑化した〔Cunliffe 1993・1995, Fig. 15〕。そして中央広場に神殿 Shrine かと推定される大型方形建物を配置し、周辺には多数の円形住居が存在した。生活遺物・各種工芸品・遠距離流通品なども多数出土している。

このように鉄器時代後期の高地性城塞は生活に不便な丘陵上に存在するが、多数の人々が居住していた。このような場には途絶した小規模城塞の人々も集住し、その高度な軍事施設は、その城塞の社会的な地位の高さを象徴したと理解することが一般的である。この頃、集落の階層性は確かなものとなった (Fig. 16)。

紀元前2・1世紀に至ると、東南部において従来よりもさらに大規模で低地に営む新しい型の城塞 Enclosed Oppida が出現した。これらには領域を画する大規模な土地区画と複合して領域型城塞 Territorial Oppidaを形成するものもあった。その例であるコルチェスターは70～80ヘクタールの規模のものである (Fig. 17)。これらの城塞は宗教的中心をもち、貨幣を鑄造することが少なくない。これらがローマ軍と対峙したブリテンの中核的拠点であり、その多くが後1世紀に途絶した。なお集落の階層性に比較して人の階層性の復元は難しいが、鉄器時代前期には宗教的活動を見出しにくいのにに対して、鉄器時代後期にはこれが復活する傾向が存在した。

鉄器時代の埋葬は二次葬・火葬骨を散骨するような形態が多かったが、紀元前5世紀末～前2世紀にかけてのヨークシャー州東部において、例外的に方形周溝をもつ墳丘に土葬する方式が存在し、その中には車や武器を副葬する高位の人ものと推定できる例もあった〔Dent 1985〕。

また東南部では紀元前2世紀後半の頃から装身具・化粧具をとまなう火葬墓地を営むようになった〔Fitzpatrick 1997〕。その中でテムズ川北部ハートフォード州ウェルウィン Welwyn などにお

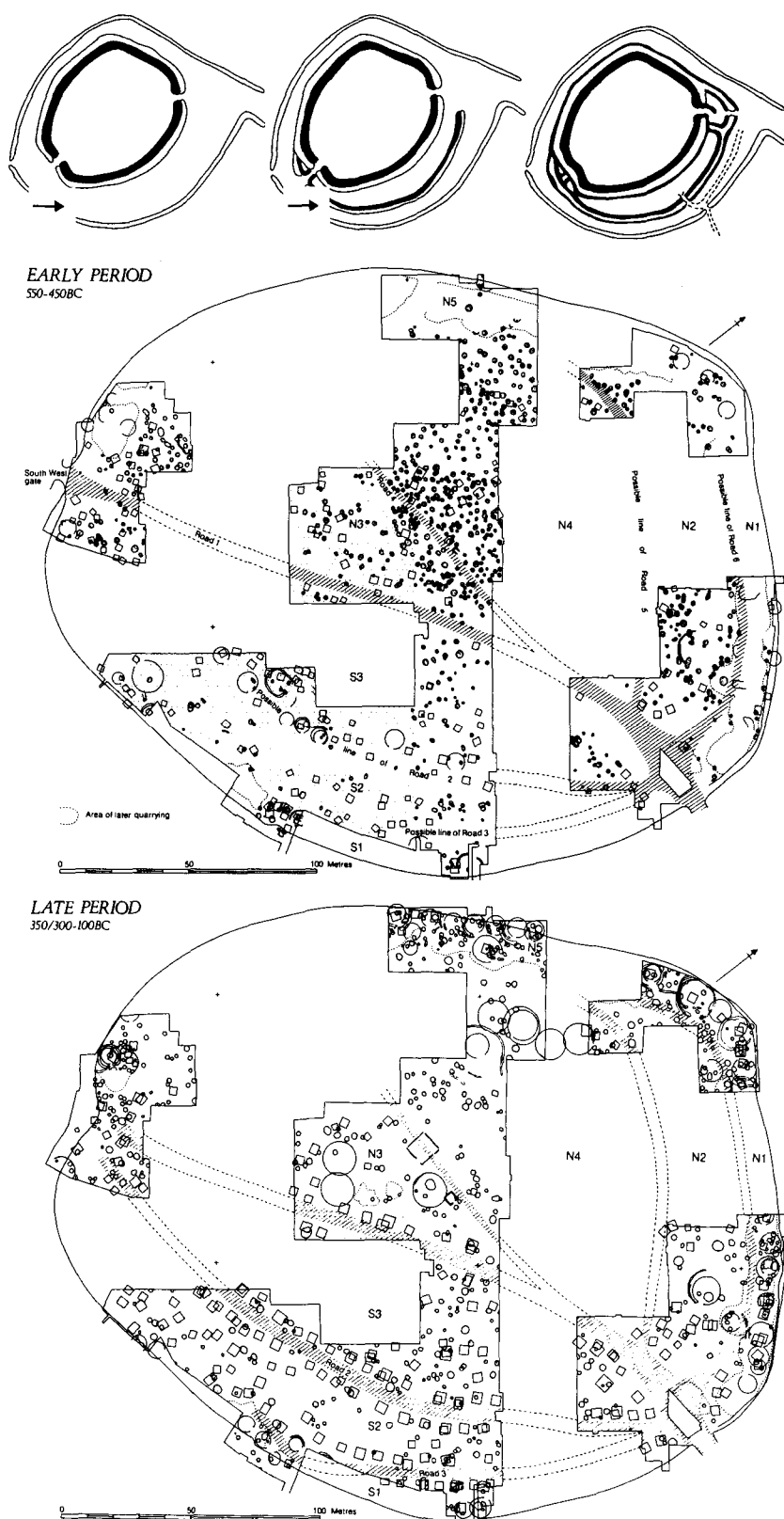


Fig. 15 デーンベリー高地性城塞 [Cunliffe 1993から]

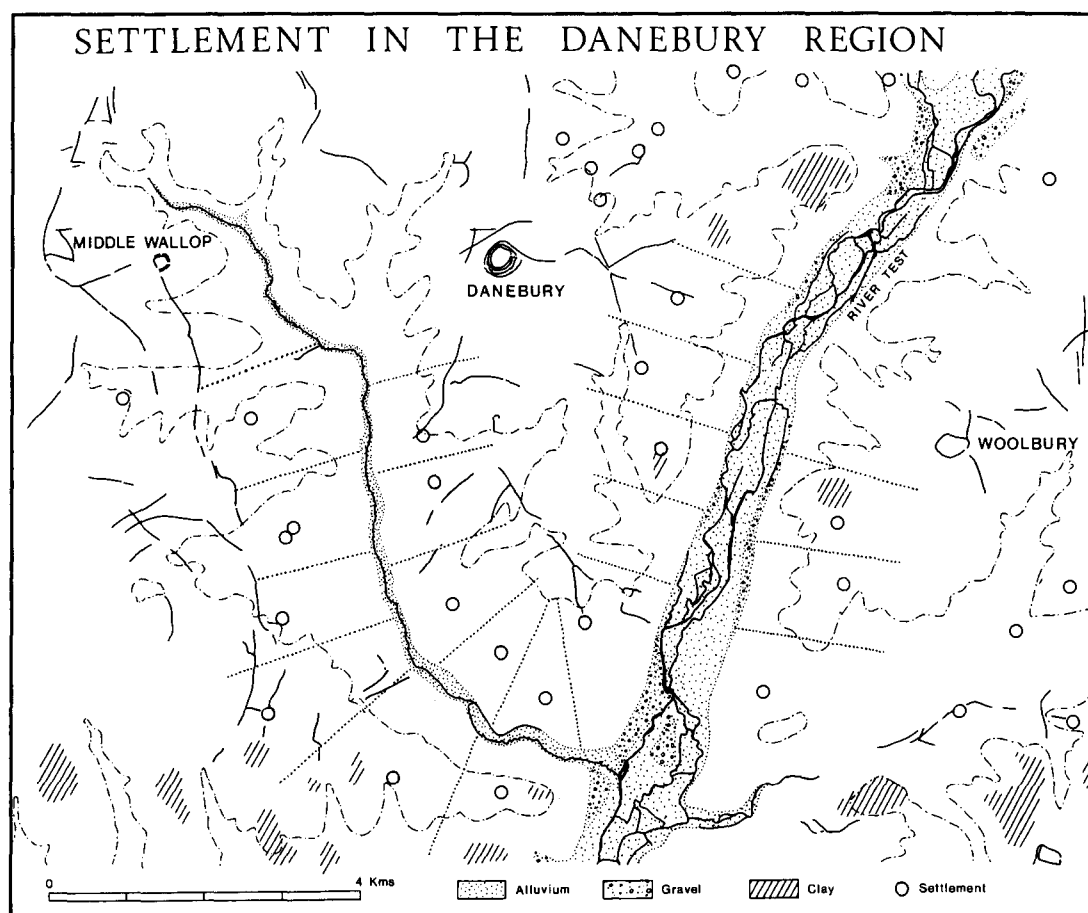


Fig. 16 集落の階層的ネットワーク [Cunliffe 1993から]

いて、イタリアのアンフォラ・食膳具ほかや、在地の種々の高級品をともなう特に顕著な事例も現れた。

以上の新しい造墓活動は類似のものが大陸ヨーロッパに存在し、それとの交流を契機として出現したと理解されている。また紀元前1世紀の頃から、金製装身具・馬具・武器・貨幣・人などの水辺埋納が著しく活発化した。鉄器時代後期にこのような宗教的活動を執行した人々は、城塞とその影響下の地域の指導者でもあったであろう。

以上のようにブリテンにおいて青銅器時代後期に本格的な農耕社会に転換して以後、記念物にかわって土地区画・防御集落の発達が顕著となり、鉄器時代後期の長期型大規模城塞の造営、有力層の造墓・埋納の活発化に至った。これをブリテンにおいて長期型の大型防御集落を形成した一連のプロセスと理解する。

なお従来の研究では、後続するローマ属州時代の大型集落を都市・町とみなすことが多い (Fig. 18)。それ以前については、鉄器時代の大規模城塞をアルプス以北の最初の町とみなす考えがある一方 [Collis 1984, Audouze and Buchsenschutz 1989], その都市的性格を否定する意見も少なくない。

しかしブリテン青銅器時代後期～鉄器時代における在地社会の充実や富の蓄積がなければ、ロー

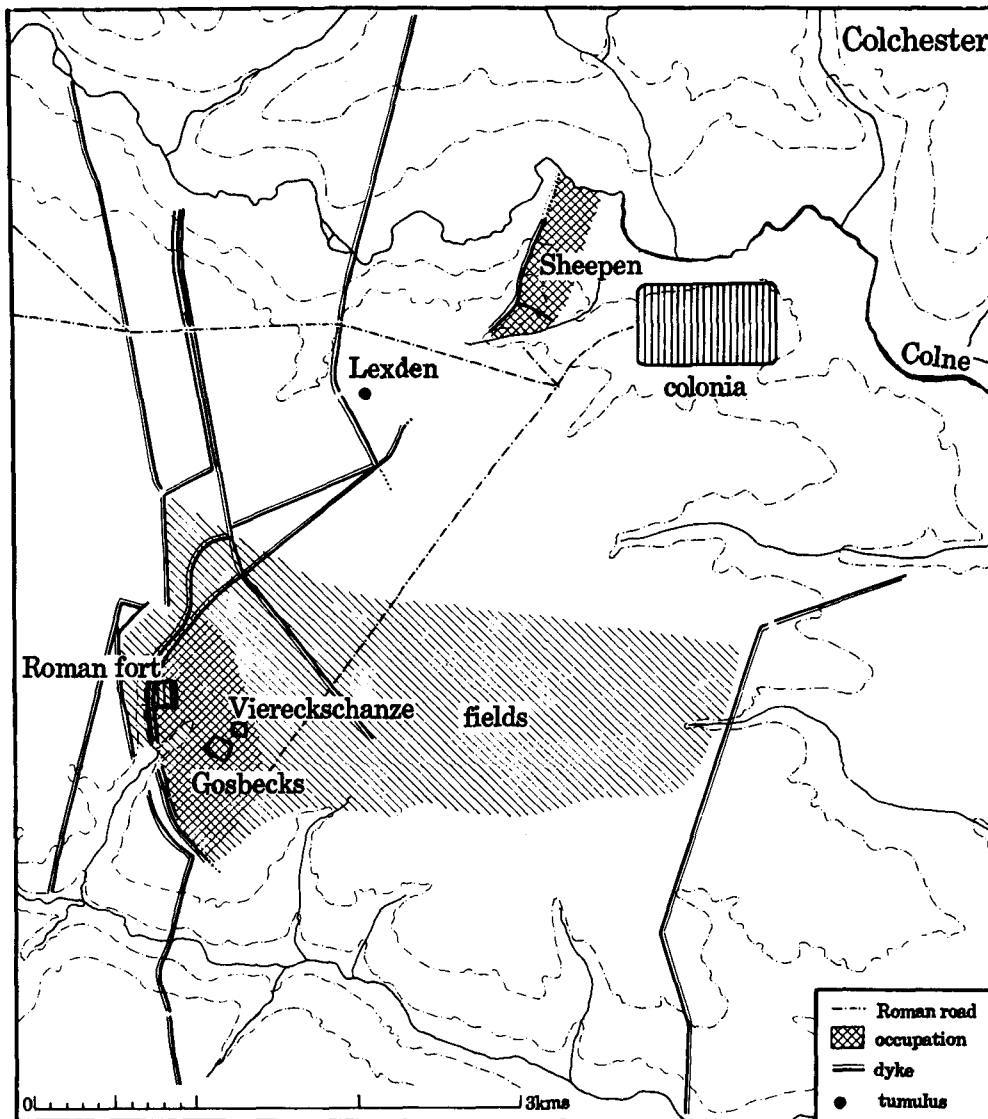


Fig. 17 コルチェスター領域型城塞〔Collis 1984から〕

マの侵攻の対象にすらならなかった可能性が高いであろう。ローマのブリテン支配もブリテンと大陸ヨーロッパの連綿と続いた交渉的一幕である。このことから本項で扱った時期にローマ属州期も含めて、ブリテンの古代都市形成過程と理解しておきたい。そのどの段階をもって都市の成立とみなすかは各研究者の視点によるが、ローマより充実した内容をもつ大規模城塞が存在したことから、私は青銅器時代後期～鉄器時代城塞の都市的萌芽・成長を重視したい。なお日本の古墳時代中・後期（後5・6世紀）に相当する頃、ブリテンの都市・町は一時的に衰退し、7世紀以後に新しい質をもつ都市形成過程が始まる。

弥生時代との比較：弥生時代には青銅・鉄を本格的に採用した反面、石の道具も存続した点で、新石器・青銅器・鉄器時代の区分ができるブリテンとは事情が相違する。またブリテンにおいて東南部・北部・西南部に顕著な地域差が存在したように、日本も画一的な社会ではなかった。しかし

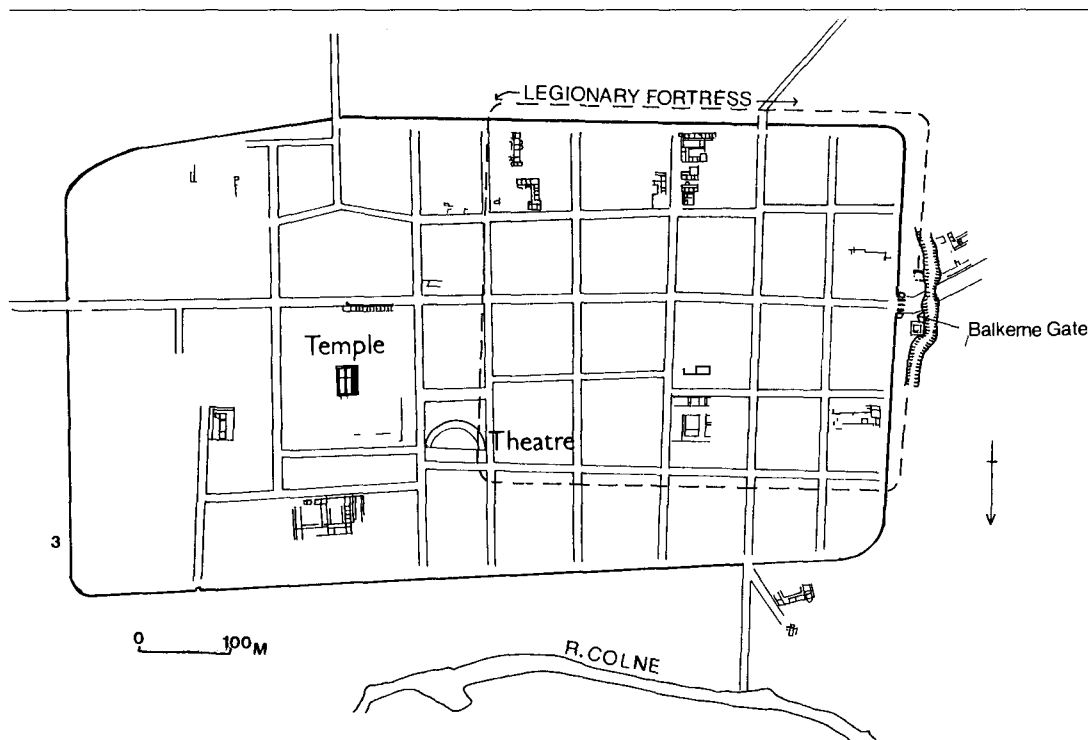


Fig. 18 シルチェスター・ローマ町〔Boon 1974から〕

弥生社会の北部九州を発信源とする基本的な動向は、ブリテン東南部の青銅器時代後半～鉄器時代の変革の全体と比較することが可能なものである。そして縄紋時代と弥生時代の境について多くの議論なされているが、ここでは社会の転換のプロセスを比較したい。今この面の弥生研究が、急速に進みつつある〔藤尾 1999ほか〕。

その初期の変化として重要なものは、弥生時代早期初頭頃における畦畔・用水路をもつ水田の出現と縄紋系祭祀の変質である〔山崎 1995, 春成 1995〕。なお弥生時代の農耕について佐原真がコメの役割を重視するのに対して、寺沢薫は堅果類はじめ縄紋時代以来の食料の重要性を指摘している〔佐原 1996, 寺沢 2000〕。他方、寺沢は弥生稲作は畑作と複合する性質のものであると評価し、弥生農耕の役割を別の形で強調した。

この点はより確かな食物定量データの蓄積が必要な分野であるが、鉄器時代のブリテンでも日本の中世でも、野生あるいは半栽培の植物性食料資料が相当量出土することは珍しくなく、栽培種にとって寒冷な地域での農耕を特色づける現象である。ブリテンでの農耕社会の成立も、穀物資料の出土が僅少な段階から野生植物資料に匹敵するかやや上回る程度に増加することに求めたものであり、弥生時代を農耕社会（農耕に基礎をおく社会）の始まりとする評価は、依然として有効と考える。

このような変革の最初の段階において日英において耕地区画が顕在化した（Fig. 19）。日本の水田の小区画畦畔は湛水のためのものであろうが、より堅固な畦畔による大区画は土地区画の性質をあわせもったであろう。畑作に畦畔は必須ではないが、ブリテンでは石積みの立派なものが出現した。日英いずれにおいても土地区画は、特定の人々と特定の土地を強く結びつけて、農耕社会の成

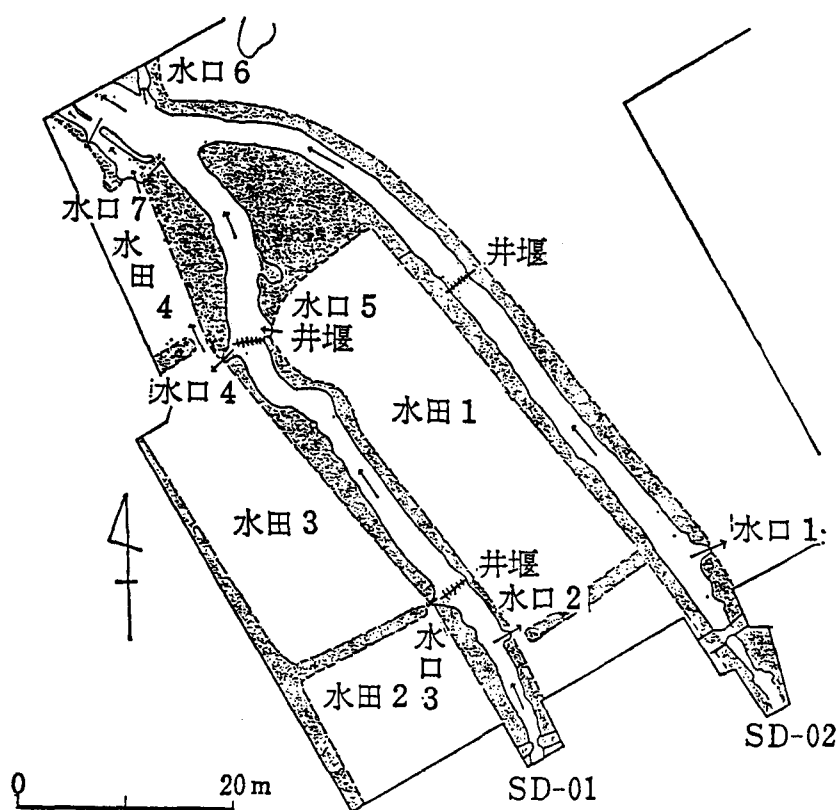


Fig. 19 福岡県野目遺跡の水田遺構〔山崎 1994から〕

立を可能にするものであったと推察する。

この動向と表裏のようにブリテンでは従来の記念物・造墓が途絶して宗教的な変革が生じたが、縄紋後・晩期の環状記念物や土偶・石棒に代表される祭祀も急速にすたれていく〔春成前掲〕。造墓についても、橋口達也が縄紋後・晩期の北部九州において再葬・火葬甕棺墓が主流であったが弥生早期に支石墓・木棺墓へと変化したことを示している〔橋口 1995〕。青銅器を軸とする弥生時代的な祭器や墓制が確立するのは弥生前期末の頃であることが多いが、春成が示すように弥生期早期段階から縄紋系の祭祀が変質することは、土地区画そのものが縄紋祭祀体系と相容れない性質をもつことを示唆しているであろう。

このような変革は一気に生じたものではなく、藤尾慎一郎が板付祖型甕で分析したように、北部九州の中でも特定の集団に始まり、より多くの集団を巻き込むプロセスが存在した〔藤尾前掲〕。このような関係は北部九州と、それ以外の地域の間にも存在したものである。そして石器組成等に示される生業と祭祀は、軌を一にして従来の仕組みを維持したり新しい仕組みを取り入れたりすることが多く、この二者は深く関わっていたであろう。

土地区画の始まりと祭祀の変革を追うように、日英において従来とは違う質の防御的集落が発達した (Fig. 20)。弥生環濠集落は新しい質をもつ社会の諸要素の複合体であり、その出現は弥生化の大きな節目である〔武末 1991〕。このような防御的集落は日英いずれにおいても初期には小規模なものが多く、それらを統合する形で5ヘクタールをこえる大規模なものが増加していく。

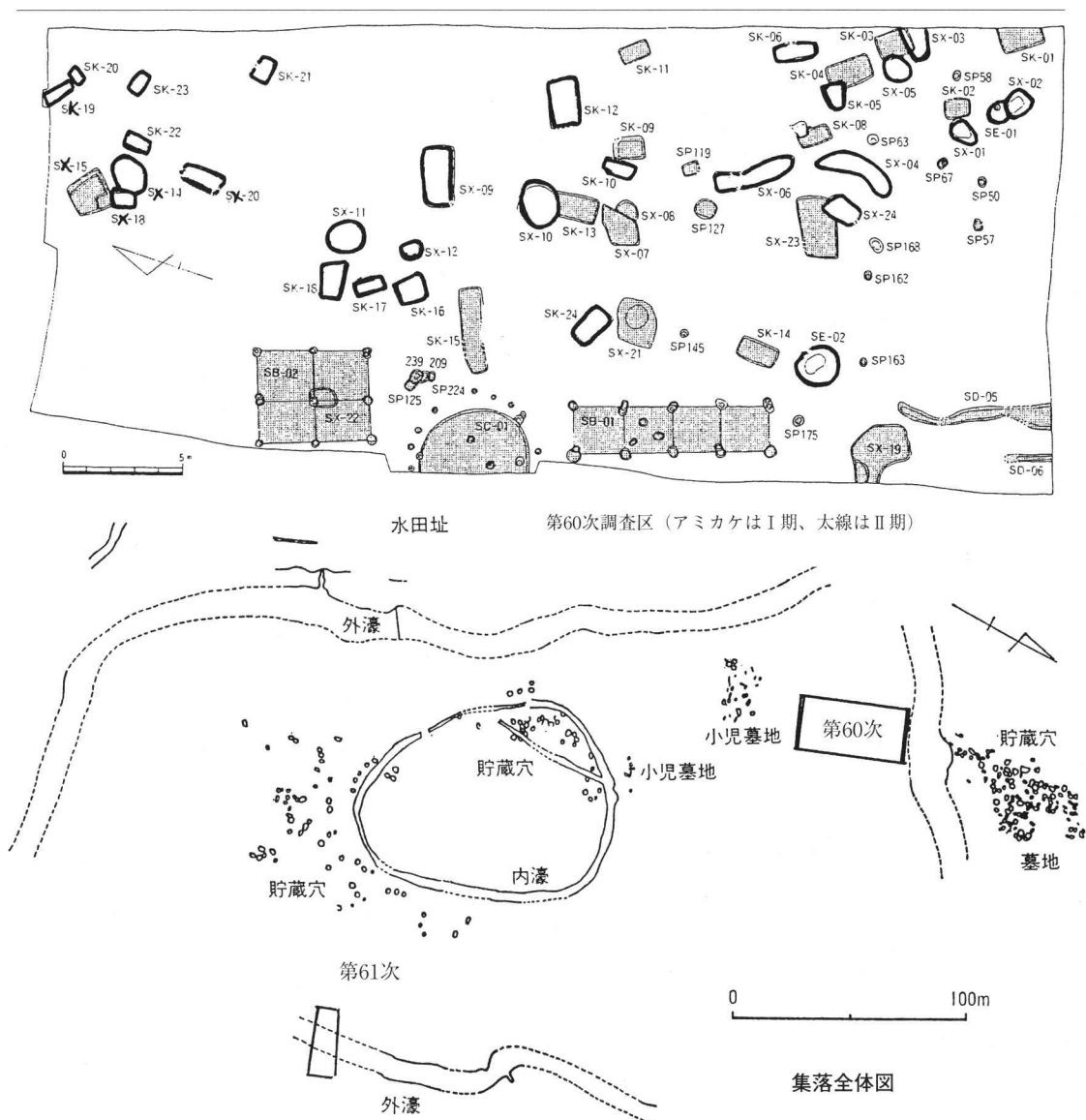


Fig. 20 板付遺跡〔弥生早～前期，武末 1998から〕

また福岡平野では、弥生中期以後に条溝と呼ばれる直線的な区画溝を広範に掘削するようになり外郭も存在したらしい。武末はその一角である弥生後期の須玖遺跡群を奴国首都と評価している〔寺沢・武末 1998〕。それはブリテン・クロチェスターの領域型城塞に匹敵するものである。

このような防御的集落をめぐる戦いの規模や、防御施設の軍事的・象徴的な役割について、日英でよく似た議論がなされている。戦いの直接的な証拠は個人埋葬が活発な日本に多いが〔橋口 1999〕、ブリテンにおいてもこの頃の実戦的な金属製武器が普及し使用痕をもつものが少なくない。戦いは活発化したと考える。また後の時代の居館・城の知識からは、防御施設が防御の機能を果たさないことを想像しにくいと同時に、それらが社会的序列・地域への威信・用水管理機能など色々な役割をもたなかったとは考えにくい。かつては記念物が果たした社会の基幹的役割を、拠点防衛集落を頂点とする階層的な集落網が果たすようになった可能性が高いであろう。

都市論との関わりでは、弥生環濠集落をもって都市とするもの、弥生条溝区画型集落をもって都市とするもの、古墳時代前期奈良県纏向遺跡をもって都市とするもの、律令期（後7世紀末以後）の都城をもって都市とするもの、律令期都城すら未成熟な都市とするものなど実に様々である〔広瀬 1996・1998, 寺沢・武末 1998ほか〕。

ブリテンとの比較の視点からは、ブリテン青銅器時代後期～鉄器時代が日本弥生時代に対応するであろう。この頃のブリテンにおける都市的萌芽・成長を重視する立場からは、日本弥生時代についても同様の立場をとることとなる。

弥生時代の研究史は膨大であり、その一端に触れることすら難しいが、ここではそれがブリテン青銅器時代後期～鉄器時代と多くの共通点をもつことを重視した。それは土地区画、宗教の変革、長期型防禦集落の成長が深く関わりながら、農耕社会の確立と都市的萌芽・成長がなされる社会であったであろう。青銅器と鉄器の普及の過程はブリテンが先行するという相違点はあるが、日英いずれも先進の青銅器時代・鉄器時代文明社会との直接・間接的な交流が社会変革の契機となった共通点を重視するべきと考える。

3 結 び

本稿は、ユーラシア大陸の東西端に位置する日英社会を比較しようとしたものである。系統的関係を探る視点はもとよりなく、東洋・西洋世界の中でよく似た位置にある日英社会が、先進文明社会と交渉しつつどのように社会を革新したかを考えることが、本シンポジウムの主旨にそう考えたものである。

その結果、東洋の中国や西洋の西アジアが新石器時代から段階的な社会的発展を遂げたのに対して、日英はその歩みに大きな転機が存在したと考えた。その特色は農耕・牧畜が付加的である段階が長い反面、農耕社会に転換してからの発展が急速であったことである。ブリテンは青銅器時代後期、日本は弥生時代開始期がその転機をなした。

栽培種の故郷から離れた厳しい環境下にあつては、在地の資源を中心として外来の農耕・牧畜を付加的に活用することは、大変すぐれた戦略である。その社会は停滞的ではなく、大規模土木工事を実施して天文的知識まで得ていた。先進文明社会からの隔絶度が高ければ、そのままゆるやかに文明社会の形成に向かったであろう。

このような社会が農耕社会に転換するには、大きな飛躍が要求されたに違いない。その契機は国際的な情報伝達あるいは一定の移民にあったであろうが、社会の質的な転換が何によって可能となったかが重要である。ここではそれを先進の青銅器・鉄器時代文明社会の影響を契機としつつ、土地区画、宗教の変革、長期型防禦集落の成長が一体となって進行する社会の成立に求めた。

この転機以後、日英の社会的発展は急速であり、それを都市形成過程と理解した。そして都市の定義を先進文明社会にあわせて厳しくすると、この過程における都市の成立を遅く評価することになるであろう。それは理由のある立場である。しかしここでは日英社会の歴史的特質を表現するには、その初期段階からの独自の都市的萌芽・発展を評価する方が実態にふさわしいと考えた。この立場では、先進文明社会型の都市に対して、その諸要素を選択的に受容・発展させた別の型の都市が存在すると考えることになるであろう。

なお本稿の基本的な考えは、佐原真が早くに日本における弥生時代以後の「急速な古代化」として提言したものを借用し、ブリテンの最近の研究成果に当てはめたものである〔佐原 1992〕。本来の意図に反した用法をしたことを畏れつつ、佐原の学恩に深く感謝する。

REFERENCES

- Armit, L. 1996. *The Archaeology of Skye and the Western Isles*: Edinburgh University Press.
- Audouze, F. and Buchsenschutz, O. 1989. *Towns, Villages and Countryside of Celtic Europe*. London: B. T. Batsford.
- Barker, G. 1985. *Prehistoric farming in Europe*: Cambridge University Press.
- Barker, G and Webley, D. P. 1978. Causewayed camps and early Neolithic economies in central southern England. *Proceedings of the Prehistoric Society* 44.
- Barrett, J. and Bradley, R. 1980. *Settlement and Society in the British Later Bronze Age*. Oxford: British Archaeological Reports British Series 83.
- Blick, C. R. (ed.) 1991. *Early metallurgical sites in Great Britain BC2000 to AD1500*. London: The Institute of Metals.
- Barton, N. 1999. The Lateglacial or Late and Final Upper Paleolithic colonization of Britain. In Hunter, J. and I. Raston (eds.) *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- Boon, G. C. 1974. *Silchester, the Roman town of Calleva*. Newton abbott: david and Charles.
- Bradley, R. 1978. *The Prehistoric Settlement of Britain*. London: Routledge.
- Bradley, R. and I. Hodder. 1979. British Prehistory : An Integrated view. *Man* (N.S.) 14.
- Bradley, R, Lobb, S., Richards, J. and Raymond, F. 1994. *Prehistoric land division on Salisbury Plain: the work of the Wessex Linear Ditches project*. London: English Heritage.
- Champion, T. 1999. The Later Bronze Age, In. J. Hunter, and I. Raston (eds.) *The Archaeology of Britain*. London: Routledge.
- Clark J.G.D. 1972. *Star Carr: a case study in bioarchaeology*. Reading: Mass. Addison-Wesley Module in Anthropology 10.
- Coles, J. M. and Minnit, S. 1995. *Industrious and fairly civilized: the Glastonbury Lake Viilage*. Taunton: Somerset levels Project.
- Collis, J. 1984. *Oppida Earliest Towns North of the Alps*: Huddersfield.
- Cunliffe, B. 1993. *Danebury*. London: B. T. Batsford/English Heritage.
- Cunliffe, B. 1995. *Iron Age Britain*: London, B. T. Batsford/English Heritage.
- Darvill, T. 1987. *Prehistoric Britain*. London: B. T. Batsford.
- Day, S.P. 1991. Post-glacial vegetational history of the Oxford region, *New Phytologist* 119.
- Dent, J. S. 1985. Tree cart burials from Wetwang, Yorkshire, *Antiquity* 59.
- Fitzpatrick, A. P. 1997. *Archaeological excavations on the route of the A27 Westhampnett Bypass, West Sussex*: Volume 2: the cemeteries. Salisbury: Wessex Archaeological Report 12.
- Fleming, A. 1988. *The Dartmoor Reaves: investigating prehistoric land division*. London: Batsford.
- Haselgrove, C. 1999. The Iron Age, In. J. Hunter, and I. Raston (eds.) *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- Hillman, G. 1981. Reconstructing crop husbandry practices from charred remains of crops. In R. Mercer (ed.) *Farming Practice in British Prehistory*: Edinburgh University Press.
- Hodder, I. C. Orton. 1976. *Spatial analysis in archaeology*: Cambridge University Press.
- Hodder, I. 1990. *The domestication of Europe*. Oxford: Blackwell.
- Hunter, J. and I. Raston (eds.) 1999. *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- McOmish, D. 1996. East Chisenbury: ritual and rubbish in the British Bronze Age-Iron Age transition, *Antiquity* 70.
- Matui, A., S. Janik L. Kaner, P. Rowley-Conwy. 1995. *From the Jomon to Star Carr*. An international conference on the Hunter-Gatherers of East and West Temperate Eurasia. Cambridge.
- Megaw, J. V. S. and Simpson, D. D. A. (eds.) 1979. *Introduction to British Prehistory: from the arrival of Homo sapiens to the Claudian invasion*: Leicester University Press.
- Moffet, L., M. A. Robinson and V. Straker 1989. Cereals, fruit and nuts: charred plant remains from Neolithic sites in England Wales and the Neolithic economy. In. A. Milles, D. Williams and N. Gardner (eds.) *The Beginnings of Agriculture*. Oxford: British Archaeological Reports 88.
- Needham, S. P. 1988. Selective deposition in the British Early Bronze Age, *World Archaeology* 20.
- Needham, S. P. 1991. *Excavation and salvage at Runnymede Bridge, 1978: the Late Bronze Age waterfront site*. London: British Museum Press.
- Pearson, M. P. 1993. *Bronze Age Britain*. London: B. T. Batsford/English Heritage.

- Pearson, M. P. 1993. The Earlier Bronze Age, In Hunter, J. and I. Raston (eds.), *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- Richards, C. C. and J. S. Thomas 1984. Ritual activity and structured deposition in later Neolithic Wessex. In J.C.Barnet and I. A. Kinnes (eds.) *The Archaeology of Context in the Neolithic and Bronze Age: Recent trends*, Sheffield: Department of Archaeology and Prehistory.
- Richard, J. 1991. *Stonehenge*. London: B. T. Batsford/English Heritage.
- Smith, I. F. 1966. Windmill Hill and its implications, *Palaeohistoria* 12.
- Steven, M. 1999. Hunter-gatherers of the Mesolithic, In, J. Hunter. and I. Raston (eds.) *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- Thomas, J. 1991. *Rethinking the Neolithic*: Cambridge University Press.
- Tipping, R. 1994. "Ritual" floral tributes in the Scottish Early Bronze Age - palynological evidence, *Journal of Archaeological Science* 21.
- Wittle, A. 1999. The Neolithic period: Changing the world, In Hunter, J. and I. Raston (eds.), *The Archaeology of Britain*, London: Routledge.
- Woodman, P. 1985. *Excavation at Mount Sandel, 1973-1977*. Belfast: Archaeological Research Monograph 2.
- 宇野隆夫 1984「ビーカー土器考」『史林』第67巻第2号.
- 宇野隆夫 1996「西洋造船・海運史(上)」『富山大学人文学部紀要』第25号.
- 岡田康博編 1997『縄文都市を掘る—三内丸山から日本が見える』日本放送出版協会.
- 小林達雄 1996『縄文人の世界』朝日新聞社.
- 佐原 真 1992『日本人の誕生』大系日本の歴史1, 小学館.
- 佐原 真 1996『食の考古学』東京大学出版会.
- 新東晃一 1999「縄文文化の光は南九州から」『縄文学の世界』朝日新聞社.
- 鈴木素行 1995『縄紋人の時代』新泉社.
- 高倉洋彰 1995『金印国家群の時代』青木書店.
- 高橋 護 1994「縄文稲作を考える」『古代の水田を考える』帝塚山考古学研究所.
- 武末純一 1991「近年の時代区分論議—特に弥生時代の開始を中心に—」『日本における初期弥生文化の成立』文献出版.
- 武末純一 1998「日本の環濠(濠)集落—北部九州の弥生早・前期を中心に」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会.
- 谷口康浩 1999「環状集落から探る縄文社会の構造と進化」『縄文学の世界』朝日新聞社.
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』日本の歴史第2巻, 講談社.
- 寺沢 薫・武末純一 1998『最新邪馬台国事情』白馬社.
- 辻 誠一郎 1999「生態系を攪乱させて有用植物を選択した知恵」『縄文学の世界』朝日新聞社.
- 新納 泉 1999『鉄器時代のブリテン』岡山大学文学部研究叢書17.
- 西本豊弘 1999「可能性が高まった縄文ブタの飼育」『縄文学の世界』朝日新聞社.
- 橋口達也 1995「墓制の変化(1) 北部九州—支石墓と大形甕棺の登場」『弥生文化の成立』角川書店.
- 橋口達也 1999『弥生文化論—稲作の開始と首長権の展開—』雄山閣出版.
- 春成秀爾 1995「祭りと習俗—縄紋的伝統の衰退と農耕儀礼の成立」『弥生文化の成立』角川書店.
- 広瀬和雄 1996「弥生の防御集落と豪族居館」『城郭研究最前線』新人物往来社.
- 広瀬和雄編 1998『都市と神殿の誕生』日本古代史, 新人物往来社.
- 藤尾慎一郎 1996「ブリテン新石器時代における死の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集.
- 藤尾慎一郎 1999「福岡平野における弥生文化の成立過程—狩猟採集民と農耕民の集団関係—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集.
- 山崎純男 1994「初期水田考」『古代の水田を考える』帝塚山考古学研究所.
- 山崎純男 1995「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』角川書店.